大和名所圖會 四

部類
冊架
號函
—〔三宅氏藏書〕—

ル 4
1695
4

門九6
號4695
卷 4

早稲田大学図書館
昭36. 6. 21 購入
藏書

大和名所圖會卷之四

目錄

城上郡　城下郡　宇陀郡

山邊郡

- 石上
- 有常田
- 食道
- 穴穂宮
- 千墳
- 豐日社
- 布栖小社
- 布留瀧 桃尾瀧
- 下部社
- 良敬寺
- 石上布社
- 祝田社
- 龍王山城
- 山邊社
- 朝日豐明社
- 二島社
- 布留忘水
- 龍源寺
- 中川
- 大和大國魂社
- 石上池
- 喜殿
- 二階堂
- 白堤社
- 疫部社
- 布留山
- 布留川 布留の瀧
- 都介氷室
- 菓瀧
- 来迎寺

山邊里
在原寺
引手山
廣高宮
食田墓
山口社
布留野
石上布留社
水分社
内山永久寺

名張川　神野寺　代田社　釜口長岳寺　緒環塚　三輪山　弁岳山　三垣山
綾社　陵社　二本杉　相撲
若宮社　平等寺　弓月嶽　佐野わたり　瑞籬宮
狭井川

春日社　波多横山　景行天皇陵　穴師社　巻向山（穴師山とも）　下杉
燈明杉　檜原　茅原　日向社
珠城山　大御輪寺　海柘榴市　磯城島高圓
門相　大橋　磯城　社

山邊清井　神波多社　竈殿橋　珠城宮　箸塚　三輪社
神寶社　綱掛　二本杉
狭井社　纏向山　玄賓庵　志紀社　宗像社

笠間山　名産白瓜　崇神天皇陵　日代宮　三輪町
一夜酒社　大直禰子社　狭井戸社
綱越社　檜原　三輪崎　金刺宮　鳥見丘

跡見橋　玉列社　岩坂井　轟橋　猪飼山　木葉宮　古河野邊　長谷山口社　白山權現　藤井　泊瀬列城宮　瀧倉社　遊部川

忍坂川　慶恩寺　嚴橿本　東田社　泊瀬山　紅葉里　玉葛舊蹟　泊瀬齋宮　蓮華谷　長勝寺　笠山　比賣久波社　冨都社

舒明天皇陵　龍谷寺　轟瀧　金平山　初瀬川　鶯山　俊成卿塔　長谷寺　道明上人墓　貫之梅　竹林寺　笠山荒神とも　糸井社　三宅原

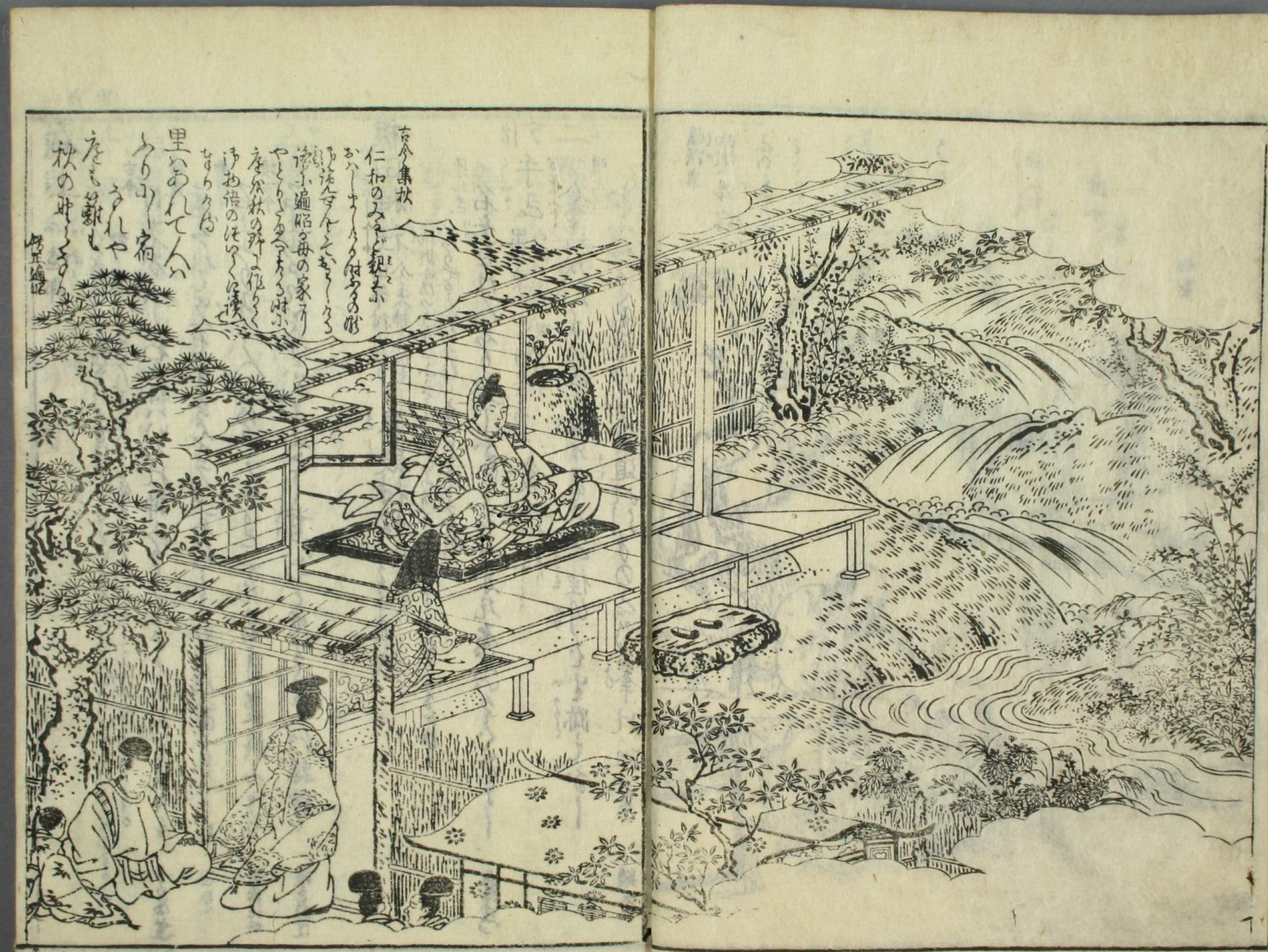
忍坂社　泊瀬朝倉宮　逆鷲淵　吉隠陵　度世　鍋倉山　定家卿塔　護法善神　安養院　與喜山天神　栗栖原　屏風里　宮古森

盧戸宮　寺川　法楽寺　鏡作社
麻氣社　韓人池　朝雲社　法貴寺
齊宮　服部社　坂ノ池　ハノ刀邑
恩智社　大和川　村屋社　敏貢御井
岐多ノ社　久須多美社　吹上嶺　墨坂
小野椿原　宇陀川　宇陀野　宇陀水室
香水ノ　篠畑社　赤人墳　檜牧川
御井社　石神殿　嶽ノ　佛隆寺
室生ノ　龍穴社　室生寺　味阪社
室生廣　血原　漆部郷　曾爾川
ノ猪川　扇風嶽　門僕社　雄山嶽
椿井川　岡見嶽　亀ノ　御杖社
雄山嶽　桃股川　八幡社　源有綱宅
神末川

吾妻明　日張ノ　櫻實社
岡田社　法古川　都賀那本社
伊那佐ノ　椋原那　尼寺社
春日社　高倉ノ　劔主社
大藏寺　阿紀ノ　松ノ城
男坂　竹川

美牟頃比社
古市社
宇陀水分社
白多社
秋ノ城
丹生社

後撰集
山の色とのへ
茅枕
旅
うりふで
山のたれ
白玉
あ〜ぬ
秋やど
宿〜ん
作者
あべのまこと
山ゑ里へ
いなのみち
石上とり人
所ふめり
ちらくらちらくらせみち


古今集秋
仁和のみかどに親王
里はあれて人は
宿
秋の野

石上山 ふる郡あり

いそのかみのふるのやしろ
古今 日光登山わかみいそのかみ
拾遺 まくれなゐのそらにたちのぼりけるかな
新古今 石上ありそ人を忘れじ
続古今 石上ふるの山ふるさとの昔あとなきまつの秋風
忠見
能因法師
俊成卿院

祝田神社 田部村ふあり 喜殿村石上ふるの千六六町 坤ふあり

伯耆ふるのかみふるさとのかみ新古今やらんとしけるに誰と
続拾遺 名をしたれ人ありぬべしふるの山本丸屋敷いくぐさまし
赤染衛門

引手山 中村東ふあり龍王と唱へ 食道村 山高く後草(眺)あり
万葉 食道成りまの山ふ妹成屋敷 山伝ひ生跡もなし
明玉 和ふぬるくそ月ゆる食道れ引まの山乃峯れ祖葉
顕季

梓弓 二階堂村ふあり 本尊 虚空蔵菩薩 腊夫婦 腊夫婦
大木 造営ふ年ふ初へ天香久山の小表ふあり 杵腊夫婦 腊夫婦
賊の子ふそ根芹成摘居くふ成聖徳ちふのみちふ成ひしふり
ひのへくに紀とせさ分ふ人と紀少傅ふ人とり
法九条

二階堂 二階堂町ふあり

廣高宮 石上ふあり仁賢天皇 穴穂宮 田村ふあり安康天皇の皇居ふり
拾遺 人をもむかさりそりそりそり石上ふるれ郡の五明乃日
墓注

山邊神社 西井戸堂村ふあり 長屋原 長屋村ふあり
神名帳三代実録出 和銅三年二月藤原宮より寧楽宮ふうつるの山の桜
万葉 花香の山日香れ里成をれくいるれ君のわるれ乃人とも
太上天皇

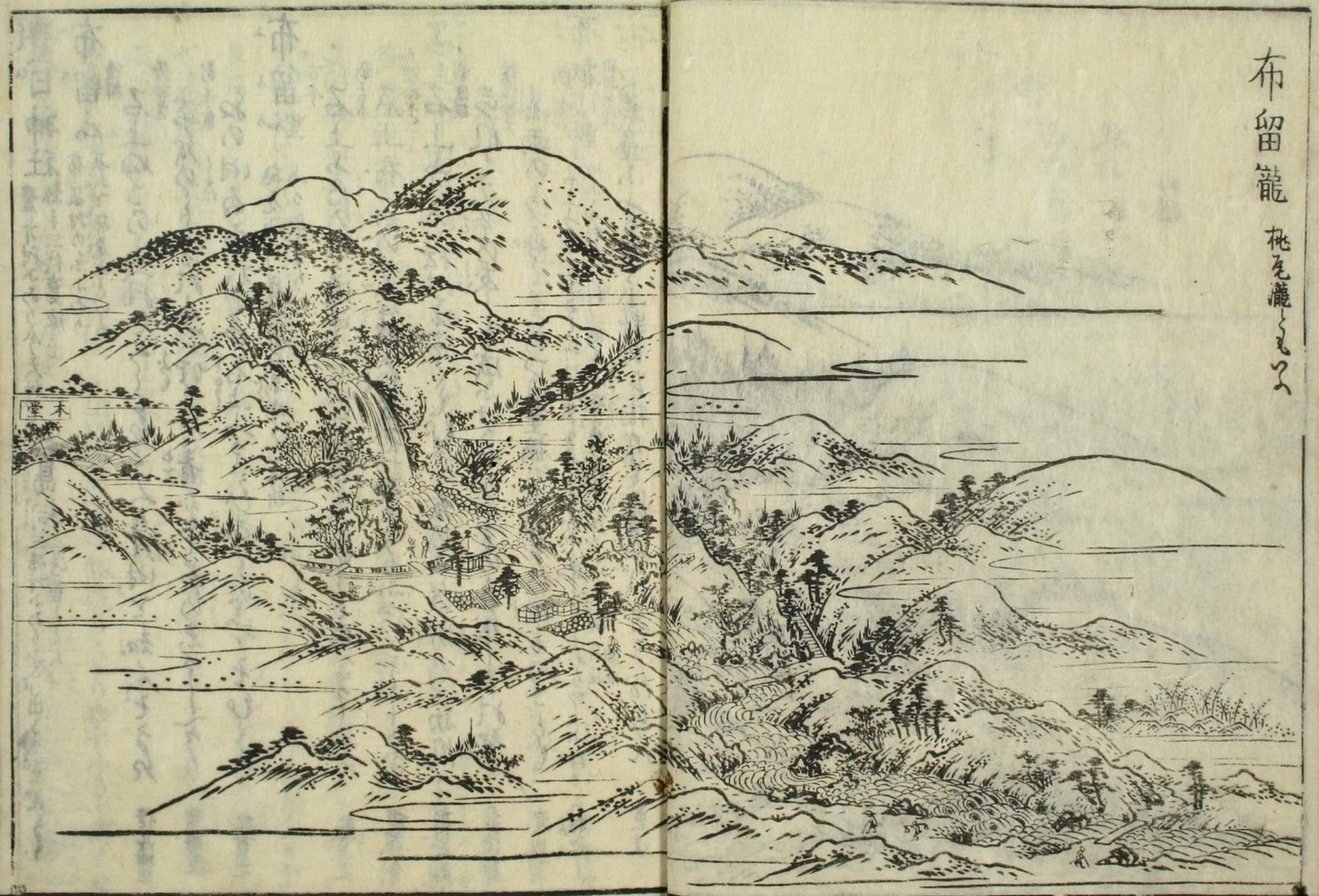
白堤神社 長柄村ふあり 食田墓 中山村ふあり俗ふ殿墓と
白毛明神と称を神名帳出 仁賢天皇の皇女

千塚 二階堂の東の山腹ふ岩穴ふあり 朝日豊明光神社 佐保荘花朝日観音堂の内ふあり今無尽と称を
こうりん千塚しるし

夜都伎神社 ふてふ村ふあり今て本明神と称を 山口神社 山口村ふあり今水口明神と称を
神名帳出 神名帳三代実録ふ出

法上邪虛空藏
如意山弘仁寺
當山は源滅の
天皇の勅願寺
日本三虛空藏
弘仁五甲午年
造立

布留社
ふるの
ゆかしく
松の雪
沾德


布留龍
桃尾瀧

豊日神社 豊井村にあり今天神と称す三代實録に出

三島祠 三嶋村にあり水若出る故若宮とも云 三嶋郷といふ

布留山 布留村の東にあり 其北を桃尾山といふ

後撰 石上ふるの山べの桜花うゑけん人をしる人ぞなき 僧正遍昭

後拾遺 をとめごが袖ふる山べは春とて青葉にぞ花のちりしこえける 俊頼朝臣

新千載 わが宿はさかりとや石上ふるきみやこに春をそふらん 紀貫之

布留野 桃尾にいたる道の辺の馬場といふ所 なり

古今 石上ふるの中道なかなかにみずはこひしと思はましやは 紀貫之

新古今 石上布留の小篠をわけてゆく一夜ともなきまくらにぞしる 攝政太政大臣

續拾遺 石上ふるのの松の葉をくもむしろにのこれ旅の初風 前内大臣

新後撰 さされ石も又光の友とや成にけるふるのさびしき 新宰相

續後拾遺 春雨のふる野べの道のつほ菫摘てをゆかん袖をぬらすとも 定家

布柄小野 石上ふるの小野も昔ハ名あり石上ふるの中道ともいふかりし小野とも枯野ともいへるや 歌枕名寄

拾玉 石上世にふるかしは小野のかしはのはやうつりゆくらん 慈鎮

布留忘水 布留川 布留高橋

新後撰 むかしみしふるの中河の忘水今さらにおもひいでけん 寂蓮法師

續後撰 石上ふるの流の末までもくるしき世にしてもなし 澄覺法師

玉葉 石上ふるきころもの身にしけて川もいくよか清ふらん 右衛門督雅有

石上布留社 布留村 及び四十八村の氏神とす 当社を延喜式の石上坐布都御魂神社にて常陸國鹿島の神宮と同躰十握劔にてまします

又の御名を天羽斬とも號を神代の劔は素戔烏尊出雲國にして八岐乃大蛇をきりし時その尾をきりたまひしに劔の刃すこしかけたりける

其をあやしみて尾を割て見給へば尾の中に劔あり是草薙の劔なり

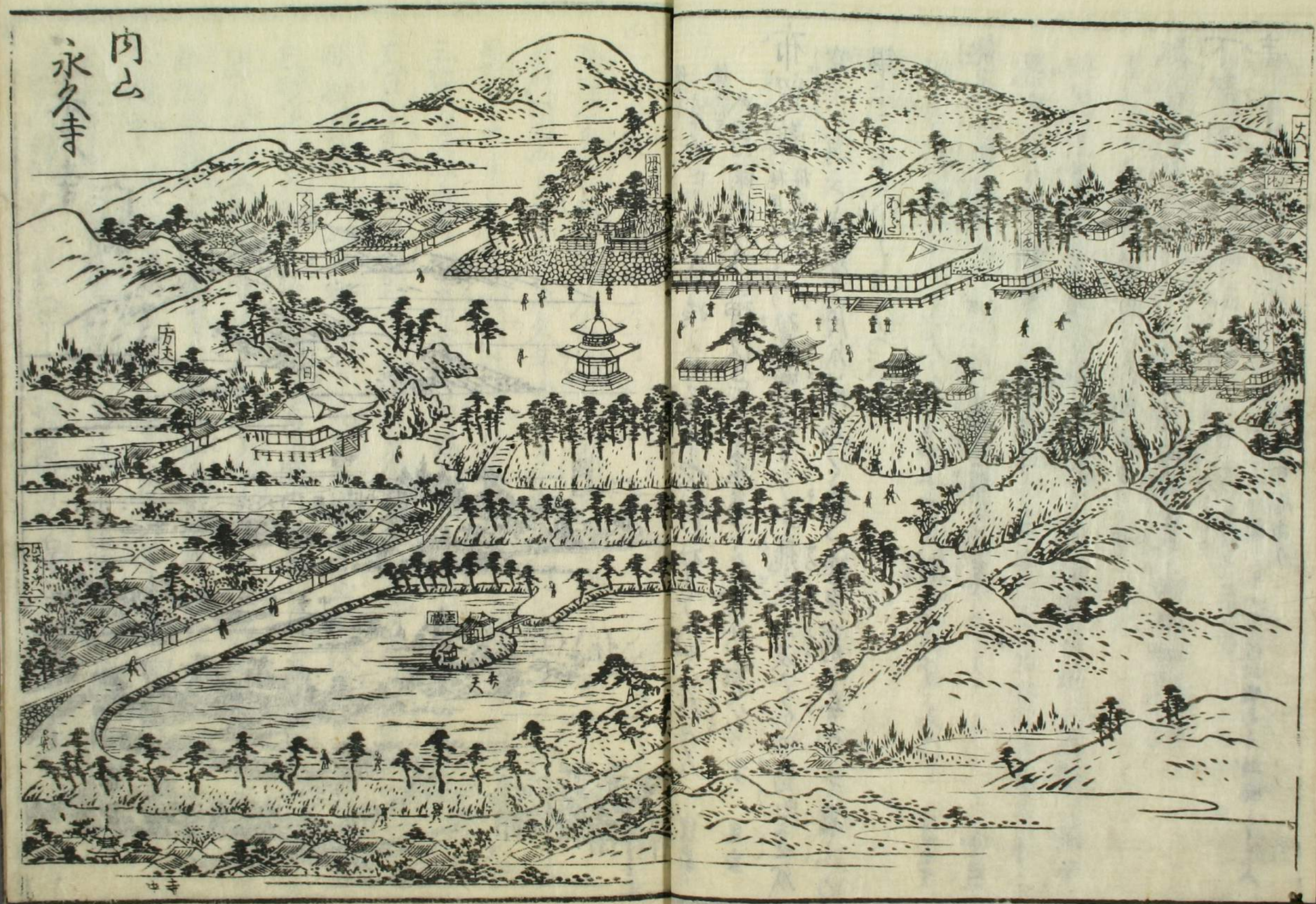
て尾張國熱田神社にあり 蛇をきり給ふ劔を蛇の麁正と号し石上に坐 日本紀

又天羽斬といふハ大蛇が羽といふ故なり 古語拾遺

寛か布留といふ所のむかし此川上に一つの劔流来しけるに

石本といふ所にとどまりけるを川のほとりにてあらひける賤女

布留の社にあり、その布に、剣のそぼふりしより神と祠く
布留の明神と号し、まつり扱こそ布留のふることぞかしこき 盛衰記
御鎮座は人皇十代崇神天皇の御宇、伊香色雄命大にうつく
天社國社なども八十万群神祭りの時大和國山邊郡石上の邑
うし、また其神十種の瑞寶、高皇産霊尊より鏡速日尊に伝り
其子味間見命ふあ、そしたり神武天皇ふまりて後に石上
の大神と号し、國家あがめ祀こと
神庫 拝殿の傍ふあり 鉾と剣と櫃あり神器しく
又剣ふうけくひあり 時内に永久ま 桃尾山龍福寺 奉祭村の傍
倭古今 宮居せしその始よりも石上布留の社と人やひろん 紀家
倭後拾遺 入月雨の降れ神杉こずくまるくるの古郭公なる 定家
布留瀧 桃尾山ふあり 翠巒峻嶺 桃尾滝 穿くく瀉ぎ寒聲月分清く走る絶糸窮ま
銀河の二千尺もいひつべし
倭拾遺 いまこそひりくもんそやと石上布留つせ分ろ
桃尾山龍福寺 布留山の北ふあり 基菩薩の開基ふくしあ、そ伽藍 後撰拾遺
嚴重ふり今頽廢して僅ふ存せり本堂ふ十一面観音を安置傍ふ
阿弥陀堂十二所権現春日祠あり足鎮守の神、其傍ふ鐘楼
ありくる院僧坊十六所ありしぞ
都介氷室 山田村ふあり 隣村福住ふ 氷室祠あり 日本紀出 都祁水分神社 鞠田村ふあり 神名帳出
下部神社 吐山村ふあり 中川神 中川村ふあり 早川村ふあり 神名帳出
青葉瀧 長瀬村ふあり 飛泉数十丈 俗ふ雄瀧と云 下流に雌瀧あり 雌瀧と云 長高さ数丈 風景奇勝あり


内山
永久寺
三社
宝蔵
天奉

内山金剛乗院永久寺 山内村の東名取院の沖獨鈷峯 開基 釋
亮慧真言傳法の人之山地五鈷の形のゆふ〳〵く中央ゆふ峰あり
されば内山と号せり永久年中の草創なれば永久寺と名附る宗旨ハ
真言ゆゑ〳〵く本堂ハ阿弥陀佛を本尊〳〵奥院の不動明王ハ日本
三躰の其一なり 観音堂千躰佛堂二層塔大師堂真言堂なを
大日如来ハ安ゆ額ハ名取院の表者と鎮守の社ハ清瀧權現岩上
明神長尾天神ハ勧請なり元弘年中笠置城没落の時後醍醐天皇
志のびく〳〵御〳〵遺跡本堂の乾ゆ有り又大塔宮も山内ゆ
ゆゑ〳〵其外諸堂魏々〳〵〳〵〳〵院四十七坊ありと云宗流を
醍醐金剛院の法流なり〳〵當山流の法頭なり
良因寺 石上布留村一名石上寺又名長峯寺今霄藥師堂と云ハ
天長年中岩守法師住持と其後傍正遍昭も此に幽居と 遍昭の俗姓良峯
又素性法師も此に住せ〳〵とかの法師の石塔ゆゑ有り 双紙ゆ〳〵

後撰集 石上にいまふたゝび日の光をかれぬくすかりの命
ゆるしくれ山寺ふ遍照僧正
ひとゝせのうんのくすりを仏の告げたまへるもの

石の上ふ旅寝ふそれをいとゝさむし苔の衣ふ我ふ借あん　小野小町

返し

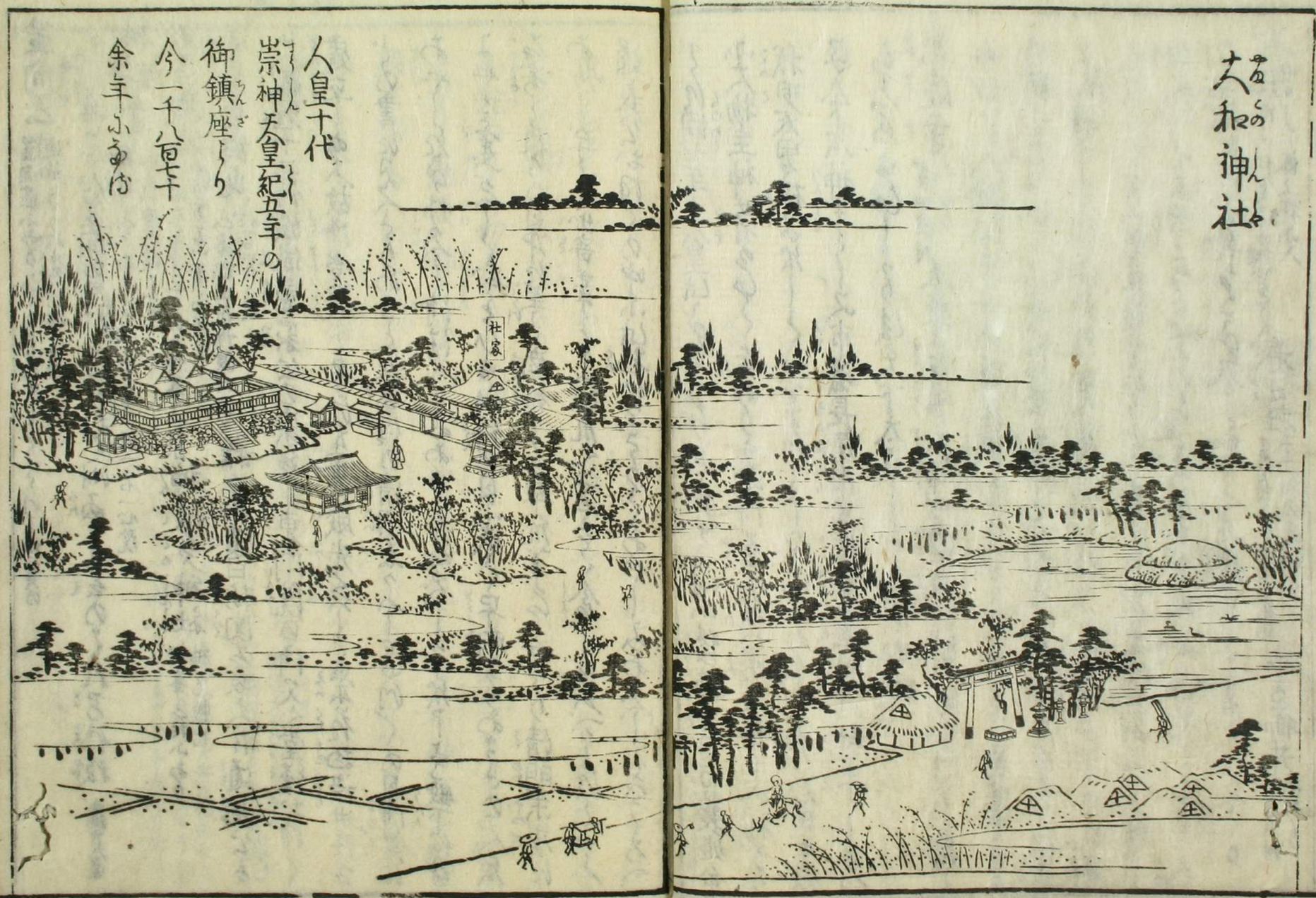
世ふそむく苔の衣ふ涙ふ袖ふ露ふ置ふ人ふ貸ん　僧正遍昭

相模家集

ふるのまふ坐ます大和大國魂社新泉村延喜式曰大和坐大國魂神社三座并名神大月次相嘗新嘗ふ幣帛ふ文徳實録曰嘉祥三年十月従二位ふ授く三代實録曰貞観元年従一位ふ授く近郷八村の氏神〻例系四月朔日

抑大和大國魂神ハ天照大神と二神あひ並ひ天皇大殿の内ふ坐ます
ゆゑ也ふ其後崇神天皇の御宇神の勅ふ依ふ
倭笠縫邑ふ磯堅
依ふ安ふ天照大神ハ豊鋤入姫命ふ
神離ふ建ふ
倭姫命ふ
ふ大國魂神ふ淳名城入姫命ふ
ふ命の髮ふ
ふ命ふ
ふ國中あ
ふ疾疫ふ死亡
ふ半ふ

同七年天皇ふ
ふ倭迹々日百襲姫命
ふ大物主神著ふ告ふ
ふ御宇ふ
我児太田々根子ふ
ふ我ふ
ふ大物主の神
子命ふ神主ふ
ふ市磯長尾市ふ倭國魂神ふ神主ふ
ふ太平ふ
ふ日本紀
来迎寺多田荘村本尊吾導大師の遺像ハ則大師ふ
ふ入滅八十七年の後朱朝ふ大平宝字七年
の浦ふ
ふ其地の極楽寺ふ
大和國十市郡茨井の三光寺ふ
ふ建暦元年の乱逆
ふ多田の末迎寺ふ
僧文化て本像とうりはあれ瑞麦ふ
ふ及ふ其ふ異ふ
名張川伊賀ふ源
春日社十三村の氏神
御井


大和神社
人皇十代
崇神天皇紀五年の
御鎮座より
今一千八百七十
余年ふる社
社家

笠間山 笠間荘にあり奈良より五里東なり山を伊賀の通路なり八雲御抄に出

毎山家七百首 立かへる笠間の里はちかけれどはなれし雲のよそにゆくかな 中納言入道

神野寺 神野山にあり法性山と号す一名一心院 三代實録に出

波多横山 一名伸峯山といふ伸峯山村にあり万葉集に出 神波多神社 伸峯山村にあり 神名帳出

名産白甜瓜 山邊郡田村丹波市村にて佳品とす 雑々拾遺曰 摂関左政大臣道長公は大職冠十二代後胤兼家公の家督上東門院の御父也堂塔おほく建立ありし故御堂殿と号す在世の威光さかんにして栄花物語世継どの書にのせたりあるとき安倍の晴明をめして日々の御鏡にあやしきものゝ侍るべし御はらひありて慎み給ふべしと申せば殿下仰のまゝにたてこもりて物いみし件の日に成て早朝よりあやしの人は禁られたる日中に至て南都より早瓜をたてまつり清明末座にありしがすゝみ出て奇事也此瓜の中に毒を含しめりといふ道長公おほくの中に此瓜にかぎりてあやしみあるべしとこゝろへ

かゝりし所に當寺の勧修僧正上座に居ながら珠数をすり咒を唱へられ瓜たちまちに踊りてゆるぎ出る大醫重雅一針を以て瓜にさし則それよりやがて頼光末座より出て太刀を抜き二つに切てあれば瓜の中に小蛇ありしが切て殺されぬ殿下おどろかれ給ひ晴明が申せしことさしこし勧修は佛力がつよく其實を知り重雅は神醫なれば眼を刺しぬ頼光は武勇の長人なればみごとに切れも首よりわれる是ぞ自然の妙なりとてその禄給りしとぞ

他田坐天照御魂神社 城上郡太田村にあり 神名帳 三代實録に出

幸玉宮 太田村にあり 敏達天皇の皇居也 ふりけ山上総村にありて云道上

景行天皇陵 柳本村にあり 陵考曰字は王之墓とよぶ此の陵ともいふ高一丈四尺根廻九十九間

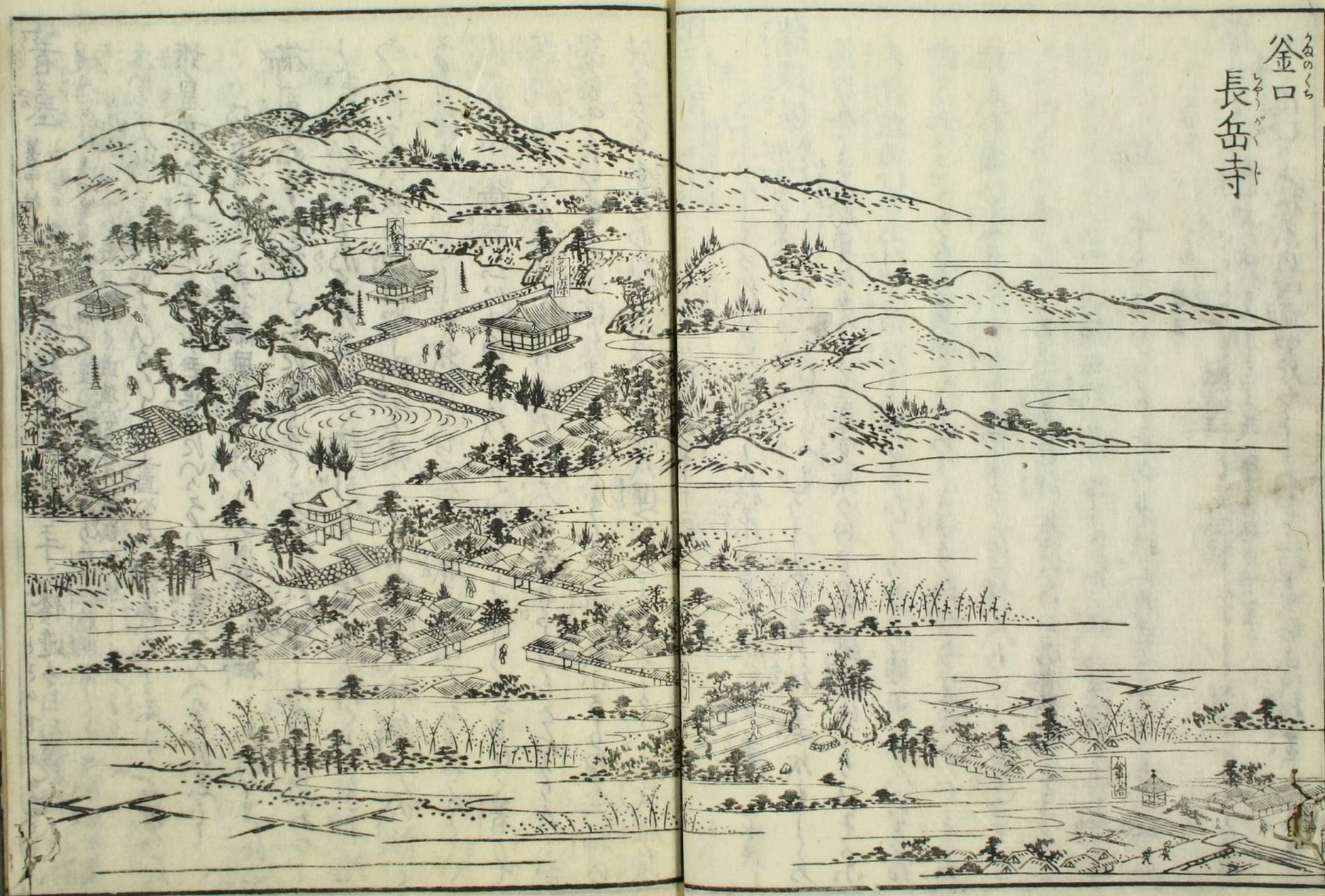
竃馬橋 倭姫記曰釜の口は東高嶺八弓槻ヶ嶽頂上に十市右部分の城跡あり此辺の道筋をみかうろざの橋といふありり小瀬に旧て石がはしるよしみかうろざしと云謡曲あり大和の名寄に入其句よ旅人のこれをまちことをはちくかゝるろれの君にそひ給のまくらことぞえさり

水口神社 渋谷村にあり神名帳出今 天王と称す

崇神天皇陵 渋谷村にあり字王之塚といふ又字和志利山ともいふ 陵考曰高十一間根廻百九十二間今東山といふ

釜口山長岳寺金剛身院柳谷の東弘法大師の開祖にて本尊
虚空蔵菩薩本堂の傍に大師の影堂あり又寶池あり其の
下ゆりに愛染堂山中に傍坊十所あり西の山頂に古城乃
跡あり其麓に千塚とて多あり我死の後葬む所と
穴師兵主神社穴師村の東弓月嵩にあり祭所に神代のむかし天皇
天降りの人に護齊の鏡二面子鈴一合所に多くあり其一の
鏡に天照太神の霊と一に天懸神と所名なり三の鏡に天照太神
の荒霊と一に國魂神と所名なり紀伊國名草宮に出雲名
なる神と又一の鏡子鈴を天皇御食津神朝夕の御食衣護
日護齊なる今巻向の穴師の太神是之
珠城宮穴師村の西にあり俗に長者屋敷と云
垂仁天皇の皇居之
沈水に國さくにけるをくの珠城の風を今も忘れず 清原公
俊成

日代宮穴師村のほとりあり景行天皇紀四年十二月
壬辰朔丙午日代宮に幸す日本紀
纒向を初めて日代宮と申す
檜原の宮は秋の夕暮 家隆
緒環塚街道の東のほとりにあり大己貴神妻なりと
行くへも知らず大原車に乗りて虚空なりけり
大胸抵のむまあ活玉依姫小通ひ
所よりあるざりくり其女にて
誰人の通ひ来るぞや女に母
かくひめ去られて苦玉巻に
行くへ去てひ切ふ鑰の穴より
ふ入こ諸山にてはりくりそ
こうるけ
痛足山延喜式穴師坐兵主神社巻向山と申す
十市伊勢の城ありあり
風むかの松原の時雨かな



釜口
長岳寺

箸墓 箸中村 ふるり むろ崇神天皇紀十年小倭迹々日百襲姫命小是孝元天皇の皇女則崇神天皇の姑内親王なり質性聰明あり能未然を識る武埴安彦の謀叛を察しかねてより夜々大物主神かよひ給ひしを書に人々に夜の来ることを問ひ給ひ姫皇女かの主ふしかみ君常にいろろれど書に人々に問ひ給ひ

とぐはりまつりて義羅威像を人々の人神ともあらさは汝の櫛司にぬるん糸をもちにきろく事ふるれ姫ころのうちふあやしとおもひ給ひて問ひ給ひ櫛司と人々とにくしさ小蛇ありけり夜の級のやうに則ちこれをさくびの時大神忽ち人の形となりて汝ちのびどもく我にてらはせ我又汝ふたりに恥をみせん大虚空を踏み御諸山にのぼりぬ姫ことやしくちのひく箸うて陰ぬけてくく倒れぬ則大市に葬りてこれを人々箸墓といふなり山塚に書て人々ぞりく築夜ふるりぬるとべ神のけたりの人ちあれど大坂山の石を運びとり墓をつくり人民相踵

ぬ遍傳て運ひたれ山の人あらそ日本紀毎手運石不越難越

法師さらにはたのぼりるいしをあるこにはこぶこをあるこにはこぶてんかも

社人の諺に曰むかしは里に箸中長者といふ人ありて富貴にして一家一族貧賤なるこんと教て曰箸に日毎に一人一家一族と共に共に成秘せんとしかの長者をしの毎日箸に捨くくに築をしりより

三輪町 倭張記曰箸中より十二町十間町の入口東の方に三輪大明神の名居立山名茶屋〜名居おのつから北の方に大御輪寺山内子若宮まの樓門あり殿あり社をるし山に社あり基其ひろしに市供所三面の大黒天あり明神南に平等寺立三輪の町こ〜〜素麺に多く製しく名産しに三輪山一名三諸山神垂山しいて三輪町のひ〜〜あり伺林様業抄曰三室神南火神樂浦秘抄曰三室〜〜神のやし〜〜

三輪山 まこ諸山の孤峯峻拔〜〜く林本青葱〜〜ちわ山脈に群山に異之山頂に不動藥師地蔵の三石の像あり奥の不動と弥勒石像

弥勒谷にあり高六尺

味酒社 三輪の祝の上て〜〜に社のおもふ〜〜ちく〜〜ぬく〜〜も 長屋王

山の文字に三訓あり味酒味酒味酒味酒崇神帝の所製日本紀の歌に見えたる

うるの酒に三輪といふ山神のほくりてをひ〜〜ゆ〜〜で伺林様業抄

大三輪
若宮

三輪社

二海一名居

續後撰

みしめなし
二海の松むら
京ふるり
こゑや
神代の
ちぎり
成らん

古今

我こそは
二海のぬしと
名乗しくは
ちぎりひさきを
松たてかな

後人考

長者屋敷

神岳山（みわやま）三輪山と同山なり詞林採葉に見えたり　神山　三垣山　神邊山　まきみねも同山之いつれも万葉集に見えたり

万葉
三輪山をしかもかくすか雲だにも心あらなんかくさふべしや

同
三諸つく三輪山見れバこもりくの初瀬の檜原おもほゆるかも

古今
三輪山をしかもかくすか春霞人に知られぬ花や咲くらん　貫之

同
三輪の山いかに待見ん年ふともたづぬる人もあらじと思へバ　伊勢

拾遺
三輪の山しるしの杉ハありながら教へし人ハなくて幾世ぞ　元輔

同
いにしへにありけん人も我ごとや三輪の檜原にかざしおりけん　人丸

後拾遺
古里の三輪の山辺をたづぬれど杉間の月の影のみぞすむ　素意法師

千載
まれに来る枕の志るしも見えぬハ霞そめたる三輪乃山本　刑部卿頼輔

新後撰
いく年のかざし折りけん古の三輪の檜原の苔の通ひ路　定家

下枝（しづえ）三輪の山の杉の下枝をいふ又志るしの杉枝
よめる基八顕注密勘に見えたり
むかし伊勢國奄藝郡に住ける人此山に入りて麻を付たる糸に風吹雨降りしくれくらくなりしに
しく来るものあり形黒くしく長ける眼ハ星のかゞやくが如し

猟師これが為に一矢射當てけり矢を負ひながらそのものの走り逃げし血のあとにつきて尋ね行きけるに遥かなる山のおくに離れて谷中に塚あり其中に隠れぬ塚のうちに神女ありて猟師が手をとりてこゝに則ち弓に箭をさしはげてまちみけれバ神女恐ろしげに語りていはく汝が射たるものハ此塚に年久しくすむ鬼なり今其鬼にとられて年来此塚にこもり汝此鬼を射殺すべしといへバ猟師そのおしへのごと柴をかり塚の口に入れて火をつけて焼殺しけり其後此神女を具して家にかへり相住むこと三年をへけるに猟師富さかへて見ひとりが寿しかさけり此男白地にわかれ去りそのゝち女うせぬ泣かなしみて尋ねもとめ行方を志らず又見もうせぬいよいよ悲しむに此女常にかたりけるハ我ハ大和國にありと三輪の山の杉の枝たる門をしるべに来よとうて大和國に行て三輪の明神の社に参りて此女にあはんと祈りけれバ社の御戸を開きて見えて此男の志の切なるを

或ハ[illegible]ハ神にあわりとあんふりうくその神れ
ふ[illegible]ハ伊勢國あ[illegible]の郡の人れり[illegible]
[illegible]諺ハ曰思ひ神とうとうとし
新古今
人ことのもり情も[illegible]ひ三輪の山杉の枝乃夕くれの雲
後撰
下ちるこの葉のこ杉の走るーしそ吉れ夜ふ[illegible]三輪の山本
後千載
かつてこそ[illegible]ふ[illegible]三輪の山のあ[illegible]杉の杉のまくら[illegible]
皇居宮内侍

三輪社 神名帳 大神大物主神社 名神大月次相嘗新嘗三代實録曰貞觀元年正月授從一位三月授正一位三十村民共預祭祀古記云
大巳貴命平定萬國功績既成幽營建宮殿於日本國之三諸山就而居住此大三輪
之神也社傍有一樹之老杉名曰驗杉
拝當社の御神ハ大巳貴命 蓋烏尊の御子なり 嫡后須勢理姫神
奪事 醫道の祖神なり
紀 ある時神先海を照らしうひ来ることあり大巳貴神問ふ曰
汝ハ何ぞ蒼く曰ひとこと足ハ汝の幸魂奇魂あり大巳貴神のこと
ものく吾幸魂奇魂今いづくにかあるやこたへ曰ふ日本
國の三諸ハ是なり故に則宮ゑうこ営ふ[illegible]

日本紀 ○崇神天皇七年倭迹々百襲姫命大物主神に若くるひく
若ありて夫ハ御美ハ家ハ是大物主神之我兒を田々根ゑて祀ハ
しめよかしとこ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
大三輪君等の遠祖なり 日本紀 扱ハ[illegible]
[illegible]ハ是くそれとなりて[illegible]社のおこ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]百ゑ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
當社ハ大和國一宮[illegible]二季の例祭あり
四月卯の日十二月卯辰の日あり

三鳥居 本社の三ある表 拝殿 勅使の宮あり 間ハ十三間白木造り右の脇に
神秘[illegible]
伐掛相 本社の庭ハあり 一夜酒社 本社の小小あり巳月の亦日に一夜酒
所御供所あり
岩倉祠 本社より 花鎮祠 本社の小小なる大國谷 貴船祠 本社より良
一町小小 [illegible]
燈明相 本社より東ハ十 日原祠 本社より八丁小小の 神寶祠 本社右の方
ハの内小小あり 神饌[illegible]
鴨峯祠 本社より三十町ハの上にあり 天皇祠 本社の右の方あり
雨乞の時ハ[illegible] 崇神天皇と[illegible]

綾椙社 本社より二町南にあり 磐城宮 本社より三町南にあり 天照大神を神始め奉る所なり 綾瀬里と
安倍の保城 世紀にあり 楼門 本社の楼門 日本逆鉾の所なり 門椙 楼門の右の脇にあり 二本あり下の門扶之
衣掛椙 右の方に大木の杉あり 玄賓僧都の 夫婦石 こゝ海明神社向の
二本椙 一株に實永年中大風の時 御新橋 武市原長者の建立なり 板戸社 左の脇にあり
駒留石 四月卯の日糸事に社司に所出仕あり下馬石なり 大橋 毎年正月十一日疫神事あり
綱掛松 毎年正月九日清浄の綱を掛る神事あり 旗建芝 毎年正月十日に五穀成就の旗を立る
恵義須社 こゝ海の町にあり毎歳晋月六日に初市にぎわあり 沈田 こゝ海の七つ池の一つなり
渕橋 長谷川に所に流れしゆふ名つくなり 菜摘田 大きな石の右にあり今菜摘菜蓋しなり
御枝屋 毎年六月晦日社人に所に出る茅輪あり 二鳥居 大橋より若宮の
間にあり 若宮社 三の宮なり 大鳥居 こゝ海の町

ふあり社記に日むかしの頃あり勲一等
大神大物主とあり今ふる

觀我鳶百譚云神代の文字にこゝ海大明神の額にあり今の
興福寺の庫中に在今こゝに小書に勝之石鄒の孫の字と芒

仰ぐ世に叔孫通なる故に考へ

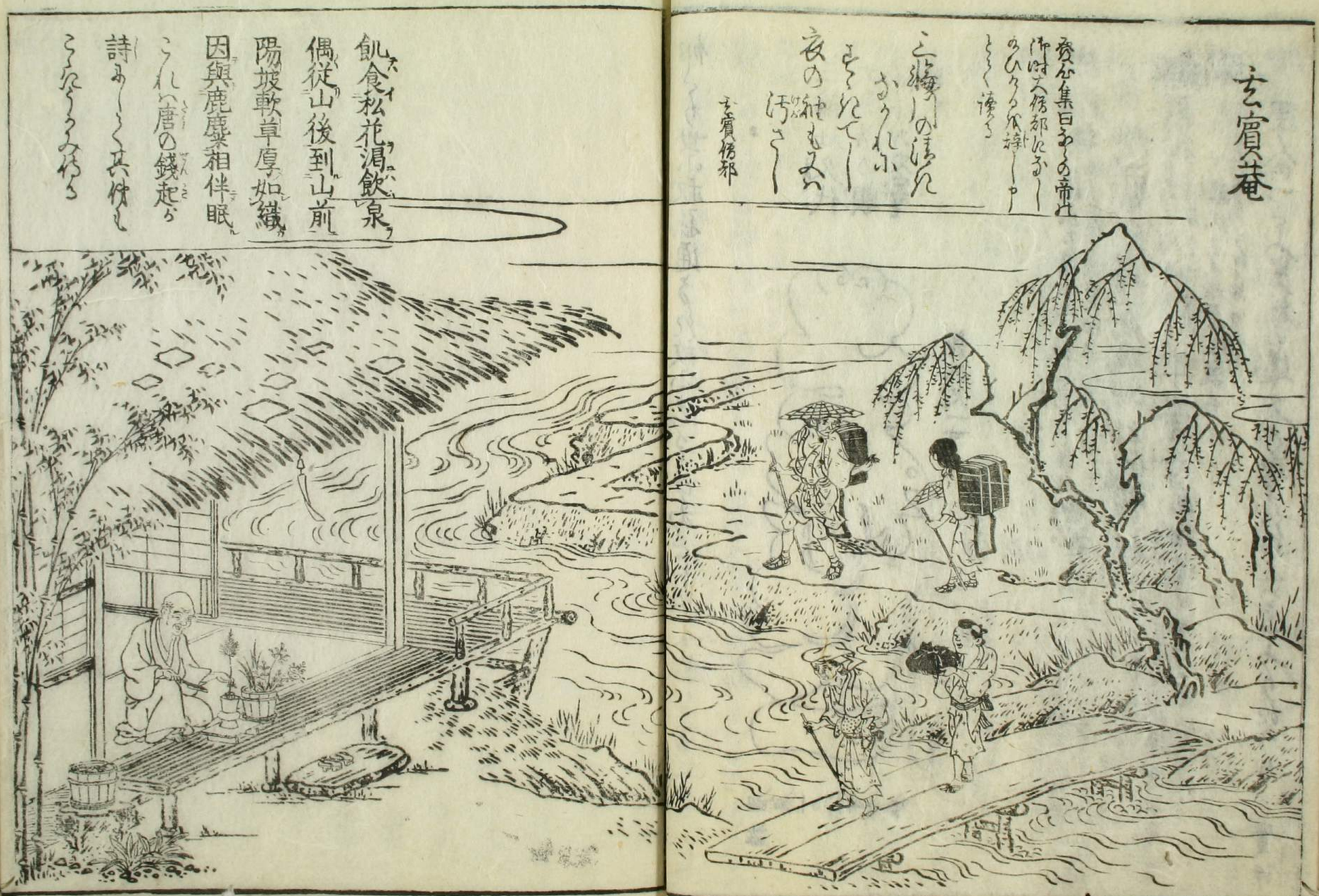
三輪社久代
大鳥居の額
神代の文字と
云云

長三尺一寸

日向社 こゝ海の嶺にあり今高宮と称す 牧井溪 水源をこゝ海にあり牧井寺の
溪に入 牧井坐大神荒魂神社 こゝ海社の北牧井川の南にあり今
綱敷神社 こゝ海村にあり 平等寺 三海村にあり本堂護摩堂祖師堂
珠城山 鐘楼護法祠堂舎十二宇あり
里人のつくる岩祝の道をくたりにのこゝ岩にくりにくり

實伊

玄賓庵



飢食私花渴飲泉
偶従山後到山前
陽坡軟草厚如織
因與鹿麋相伴眠
こうしい唐の錢起が
詩みしく共伴も
こゝろこゝろみたる

纏向山（まきむくやま）三輪山の東北にあり一名穴師山ともいへり和歌に弓月嶽といふ南は檜原山といふ東は初瀬山に連り西は珠城山と痛足山の所なりへ至り峯平が

纏向溪（まきむくがは）一名穴師川といふ水源は纏向山よりおちて穴師初和辻村箸中を歴て大豆越をこえ城下郡に至り初瀬川に入

巻向坐若御魂神社（まきむくにいますわかみたまのじんじや）三輪山の北巻向の檜原にあり神名帳三代實録に出

檜原（ひばら）纏向山の南をいふ

万葉
巻向の檜原にたてる春霞おほにし思はゞなづみこめやも　人丸

万葉
行川の過ゆく人の手を折ねばうらぶれ立り三輪の檜原は　仝

拾遺
いにしへの跡しもなき菜摘らん巻向のひばらのこすゑて日数経ぬれば　元輔

新古今
巻向のひばらもいまだ曇らねば小松が原にあは雪ぞふる　家持

新勅撰
巻向のあなしの檜原春くれば花か雪かとみゆるゆふしで　好忠

玉葉
巻向のひばらの山はかすみつゝ春の霞はなびきにけり　基俊

続後拾遺
杣人の道やたゆらし巻向のひばらもみえず霧立わたる　権中納言長方

同
花なくて花ぞちりける巻向のひばらが上にかゝる白雲　僧正公朝

新千載
春やとき川音さへ巻向の穴師の檜原に霞たなびく　俊成

新後拾遺
春霞たちゐる巻向の檜原は山の色ぞかはれる　清原深養父

新続古今
巻向の檜原のおくのかねて花のよしのゝ山さくらかな　土御門院

同
いつしかと山の井をいでゝ巻向の檜原は今朝も霞わたりし　中園入道前太政大臣

弓月嶽（ゆつきがたけ）纏向山の峯なり足引より初瀬山に連る
八雲御抄に弓槻は初瀬なり

万葉
足引の山河の瀬のなるなへに弓月が嶽に雲立わたる　人丸

続後拾遺
わけくれは霞さかりなくれの弓槻かたけに雪はふるらし　家隆

風雅
巻向の檜原の嵐さえ〳〵て弓槻が嶽に雪ふりにけり　[illegible]

拾遺愚草
初瀬路や弓月が下にかくろへて人に知られぬ秋風ぞ吹　定家

大御輪寺（だいごりんじ）馬場村にあり三輪大宮若宮の本地仏堂二宇三重塔護摩堂蔵経堂伽藍神等あり護寺法師の開基といへり縁起に曰く欽明天皇の御宇三輪明神の通ひ給ひし女ともいくたびとなくしたひ其子十歳ばかりの時常の人にはあらずかの若宮をもて守りしたまひ神の御子なりけるゆゑ此神の御許にいたりてさながら人にそひかくしてまつりける世の人これを神の御子なりと定め末代まで特にせんとて大三輪寺の名をさづけり太子傳撰集抄にもあり

玄賓庵の舊趾(三輪山の北檜原谷ふあり一名玄賓谷とも云)

十町ばかりあり(日ふ社より北へ町)山空くしくして常に杉子落谷幽
東にあり庵の外下樋のあるこふあり

ふるく人跡稀なり堂に玄賓僧都ふ住て白雲と
枕ふ風を月と共ふ清くして世の塵埃に染ることなく
解脱の室門にいたりて抑此僧都ふ姓は弓削氏河内國の人
釋書 山階寺の上事ふ任ぜられ者ふりくれと世ふ厭人ふくして
天ふ寺院のまうけふ成ぬ三輪川のやとりふ僅ふ庵
をむすびて住ける極武帝の御時山寺ふまいりて強ふ
めしくれて適ふ逢ることなくして わふまいりてなり
されども本意なくして出りひろるまや其後越後のくに落
大なる海のふ渡りすしていませしを尋ねる人ふのそこく帰て
のぼるありふそなくみとめて対面せんとおもひて帰てるおも
ふひとれたかの月日ふいづちともなく身を隠さんとしてなり

發心集

三輪崎 三輪山の南川尾ふ流れて長谷川ふ入る

佐野の渡りもまた此ふ出る

くるしくも降来る雨か神之渡捷取ねてふ家もあるふ

万葉

一云 三輪の崎夕塩さゝ村ふ多る佐野の渡り舟 定家

倭名抄記曰三輪の町ふ出る長谷川ふ流れ出る小濱あり土人これを佐野の
三輪の崎といふ山を成佐野と云ふ

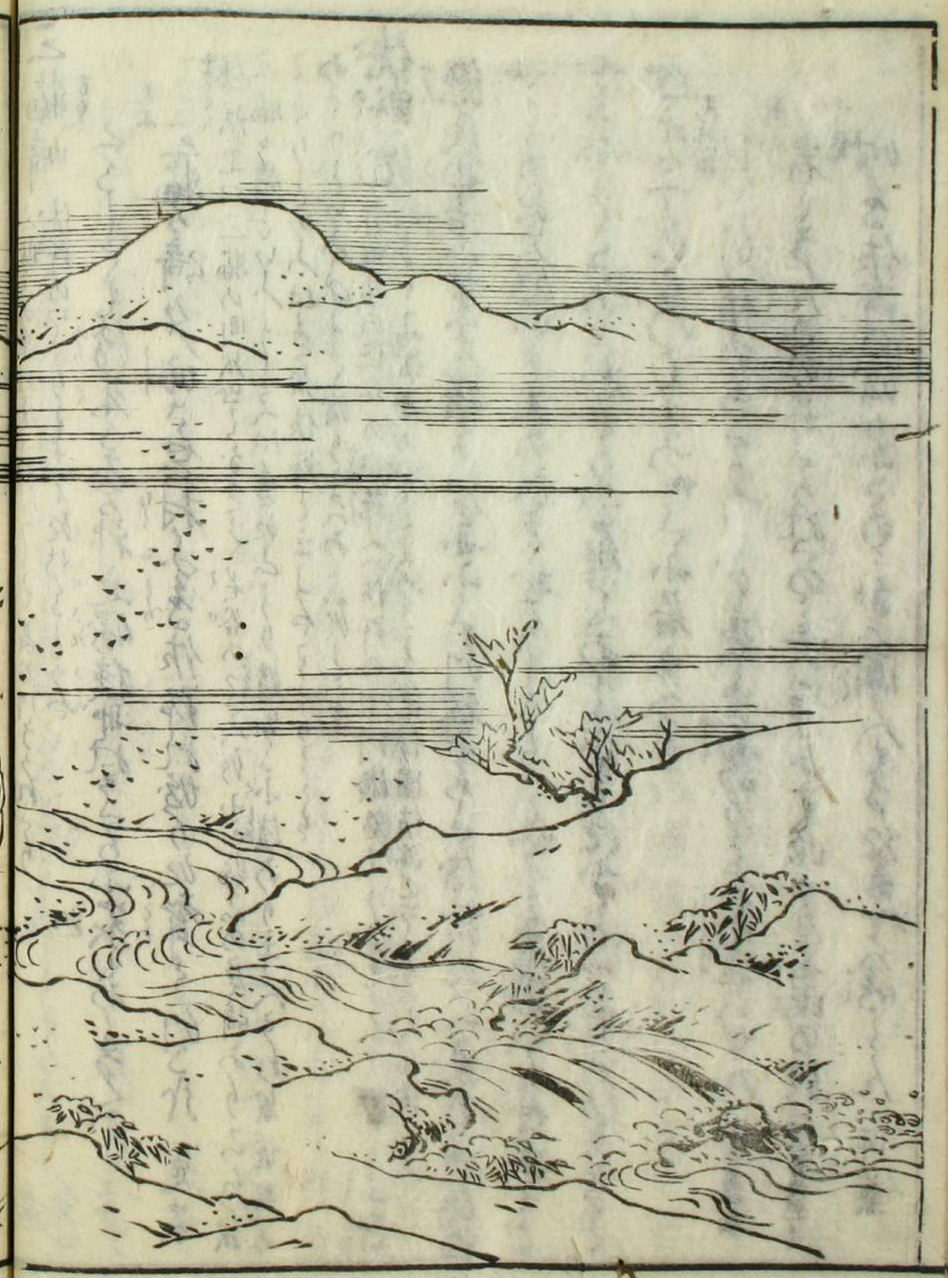
あくりといふ山ふ成ふ佐野の中川瀬絶しくるとくして上野
佐野渡 井蛙抄曰佐野の舟橋ふ佐野の渡 國語 又佐野の岡とよめる紀伊國佐野ふ大和國
源氏物語ふ某大將ふ成ふ所ふ新ふ家のさびの
やうふ大ねいと志のびくしたる
中々くさのわるふ家もあるふ成ぬとも
びたる中のこゝろもつかふ居の人て

新後撰 月ふり佐のつるの林の夜ふ宿あるこそ泊やはせん 信濃國助

新拾遺 宿もとれたさのわるれさのこゝやはなとてもひとなる雨の夜 保家長朝臣

千首 時る佐野の渡りふさのこゝる風人もる名を尋ぬ 師兼

新古今
駒とめて
袖うちはらう
影もなし
佐野のわたりの
雪の夕暮れ
定家



海石榴市（つばいち）金屋村より四町ばかり東にあり 近年観音堂あり 源氏玉鬘巻云かくあり

ながらもなほこの君をたづね出せ奉らんとおもほしけれど 猶ただ

いちといふ所に四日といふ巳の時ばかりにいけるこゝちもせでいきつき

給へり 略 日くれぬといそぎたちて御あかしのことしたゝめはてゝいそがせ

いそがせば中々いとわづらはしくて 略

枕草子云 市はたつの市 さとの市 大和にあまたある中に初瀬にまうづる人のかならず

そこにとまるは観音の縁のあるにやと心ことなり

能因歌枕云 海石榴市はたゞ市の名なり

大市といふ土蜘蛛が住し所なり 海石榴市とは別所なり

林逸抄云 初瀬へまゐる人のつばいちにとまりて御明のものなど用意

をする所なり 小右記曰 正暦元年九月八日長谷寺にまうづ

の途 椿市にいたりて御明燈心土器などとゝのへ御堂にまうりて

諷誦を修し布廿端御明万燈をけさせなどしけるとぞ

万葉 紫は灰さすものぞ海石榴市の八十の衢にあへる子やたれ

海石榴市の八十衢にたちならしむすびし紐をとかまくおしも

志紀御県坐神社 金屋村にあり 志貴宮と称す 神名帳及び三代実録に出

磯城嶋金刺宮 金屋村の西南初瀬川の南にあり 欽明天皇都を磯城嶋に遷しまして金刺宮といふ 日本紀に見えたり 又林逸抄曰 今磯城嶋といふ一郷の内にあり 金刺宮の向に竹原あり其内に小社あり 是欽明天皇の内裏のあとなりといへり 今田畠ありてしるしあり

詞林採葉抄曰 磯城嶋は大和国の名所 皇居なり 崇神天皇磯城瑞籬宮 欽明天皇磯城嶋金刺宮なり 八雲御抄曰 大和国と云々

扶人皇三十代欽明天皇紀元年七月に都を倭國磯城郡磯城嶋に都をうつしたまひ同御宇十三年始て佛法日本にわたる

世尊滅後一千五百一年といふ

万葉 志き嶋の倭國はあとさかえはなにほひさくあれよし

月清 大和かも志きしまの宮しき嶋の昔はいとゞ秀やさてん 良経

壬二 志きしまや三輪の檜原も万代の君がかざしと折やそめけん 家隆

磯城瑞籬宮 三輪村の東志紀社の西にあり 崇神天皇三年に都をうつし給ふ 瑞籬宮といふ

新古今

しらくもや　こしのしらやま
白雲やこしの白山の
くもゐより　いでそめしかな
雲井より　出そめしかな
ちぎりの月

堀川院

礒城嶋高圓山 三瀧嶋の興赤尾山の東 龍谷村ふあり

壺後撰 ちはやぶる高円山の桜風ふくごとに雲がくれつつ 續後拾

宗像神社 三座外山村ふあり今春日と稱ス 神名帳ふ及ひ三代實録ふ出

鳥見丘 外山村の上東の方にあり足ヶ宇陀郡萩原村に至ること上古ものこれり 多見山と號ス白山ヶ白木村にあり白山の祠ヶ白川村にあり舊事紀曰 鏡速日尊河内國の上嶽峯より大和國多見の白山に遷坐に帰ちれ

跡見橋 外山村ふあり 恩坂川に跨ぐ 恩坂山 恩坂村の東ふあり 恩坂川 多武十市郡栗原ヶ恩坂赤尾外山ヶ流れ

川合ヶ至ル

寺川ふ入

舒明天皇陵 恩坂村の上ふあり陵圖考曰舒明帝の陵字殿々塚と云 高サ十七間根廻百三十六間

敏達天皇の皇女糠手姫皇女 大伴皇女墓 延喜式ふ出

田村皇女墓 延喜式出

鏡女王墓 舒明天皇の陵域内ふあり 恩坂山呂坐神社 赤尾村にあり今 延喜式出此三墓ハ倶ふ

恩坂坐生根神社 恐坂村ふあり神名帳及ひ 恩坂山呂坐神社 恩坂村ふあり 神名帳ふ出

天一神と称ス神名帳及ひ 三代實録ふ出 正烈神社 龍谷村ふあり 三代實録ふ出

慶慈恩寺 恩寺村ふあり 龍谷寺 龍谷村ふあり 泊瀬朝倉宮 黒崎岩坂二村の間 雄略天皇有司に命ス泊瀬朝倉に設け天皇御住ス帰ス

故に宮と定む帝王編年ふ城上郡磐城谷ヶ長谷より南北町ヶ云ふ

岩坂井 岩坂村ふあり一村名 山井と坂ふ渴ス 巖橿本 白川出雲の二村の旧號ト云 人皇十代崇神

天皇四十三年天照坐神大和國伊豆加志本の宮にうつり

ひ〻く八年ふ天ひなりくだる 倭姫世紀 磯城巖橿之本ともに葛本宮と書ス 山紀

出人曰ふ天照坐神そさ也ひ〻ふ内ふ礎三つあり按ずるふ磯城巖橿ハ今里神ふ名のこ遺ものり伊豆毛村ハ十町をへり

神ハあり伊豆加志本の名居の名に付ケ云ふ

近年享保五年に華表ふ立ス

轟瀧 迹驚淵 轟橋 倶ふ白川村

物茎之文 日本紀曰

轟の瀧はいろふかく〻かはく〻くおそろしく〻〻

天武天皇白鳳八年帝幸泊瀬妻迹驚淵上

秉田神社 白川村轟瀧の上ふあり 金平山 白木村上方にあり山勢高く聳へ

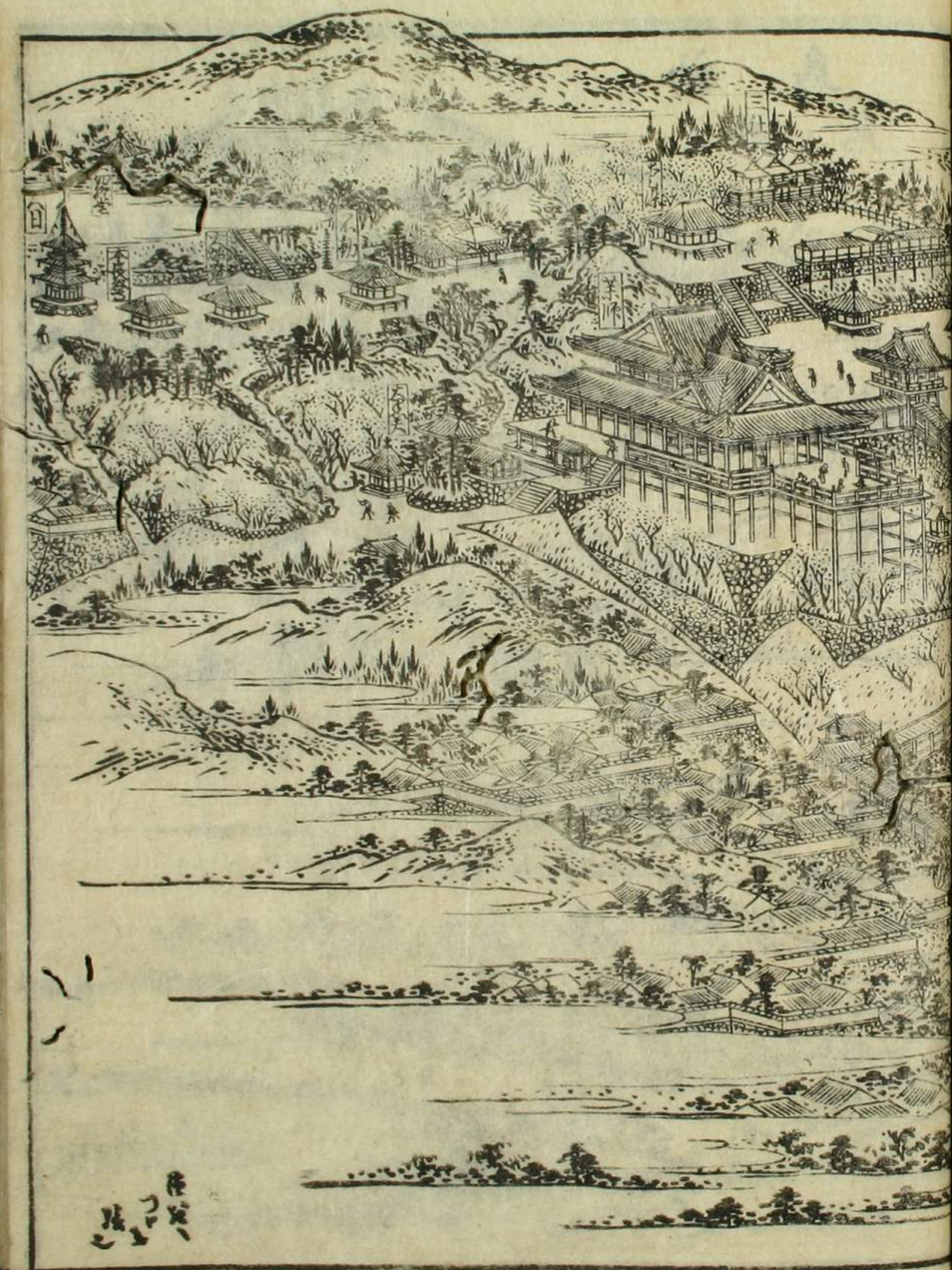
今白山社と称ス 巔に到れ〻と遥ス 吉隱陵 吉隱萱森二村の間ふあり今高塚と称ス延喜諸陵

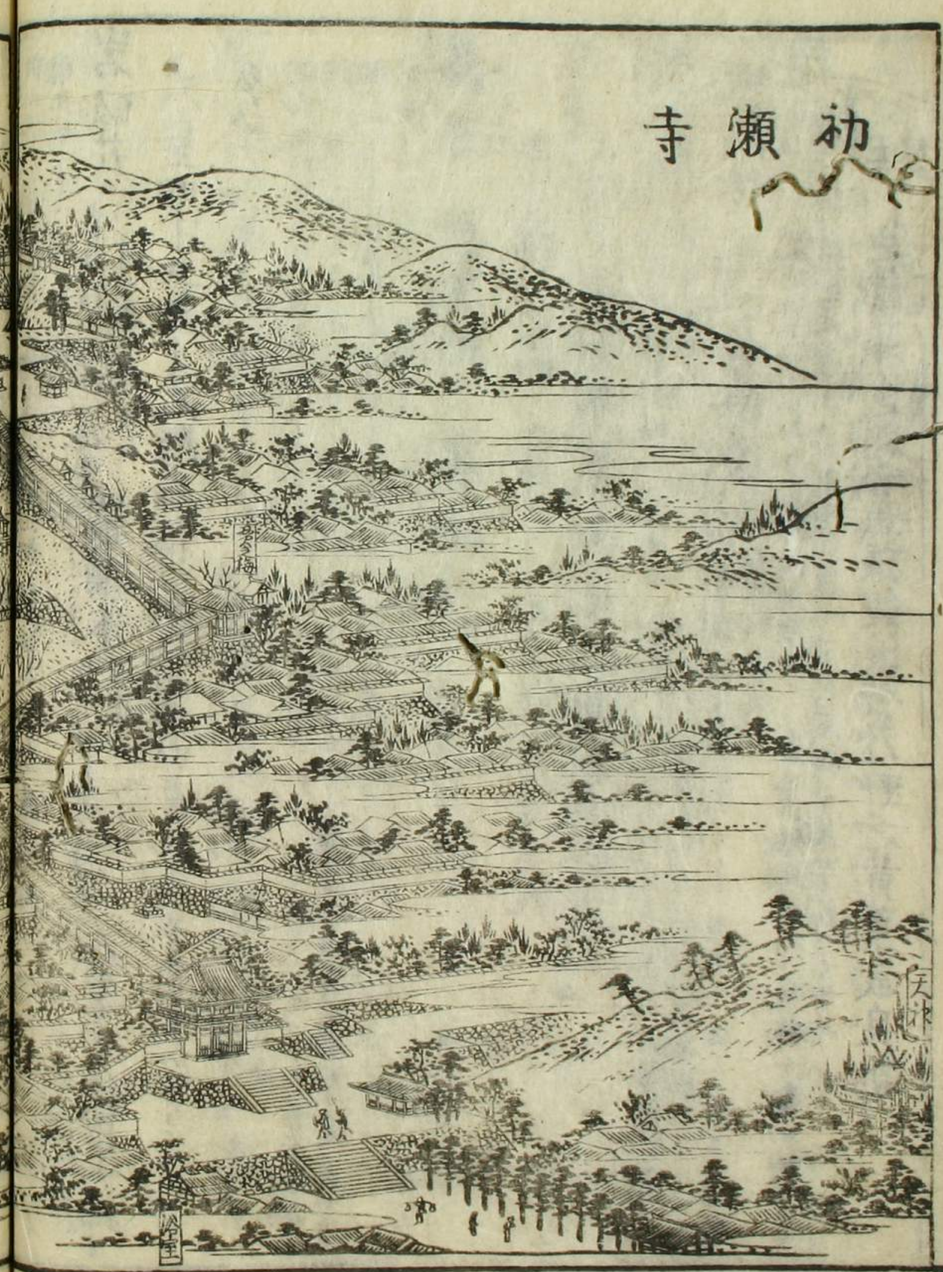
西海道 式曰皇太后紀氏

猪飼山 吉隱村の上方ふあり山中に椒樹多ク秋の末爛漫の時ハ蜀錦と翻ふ似ス

持統紀九年十月菟田吉隱ふ幸ス其年ハ浪芝ハ稔と云

五月 五月之渚芽子花吉魚張能浪柴乃野之黄葉散良新




初瀬寺

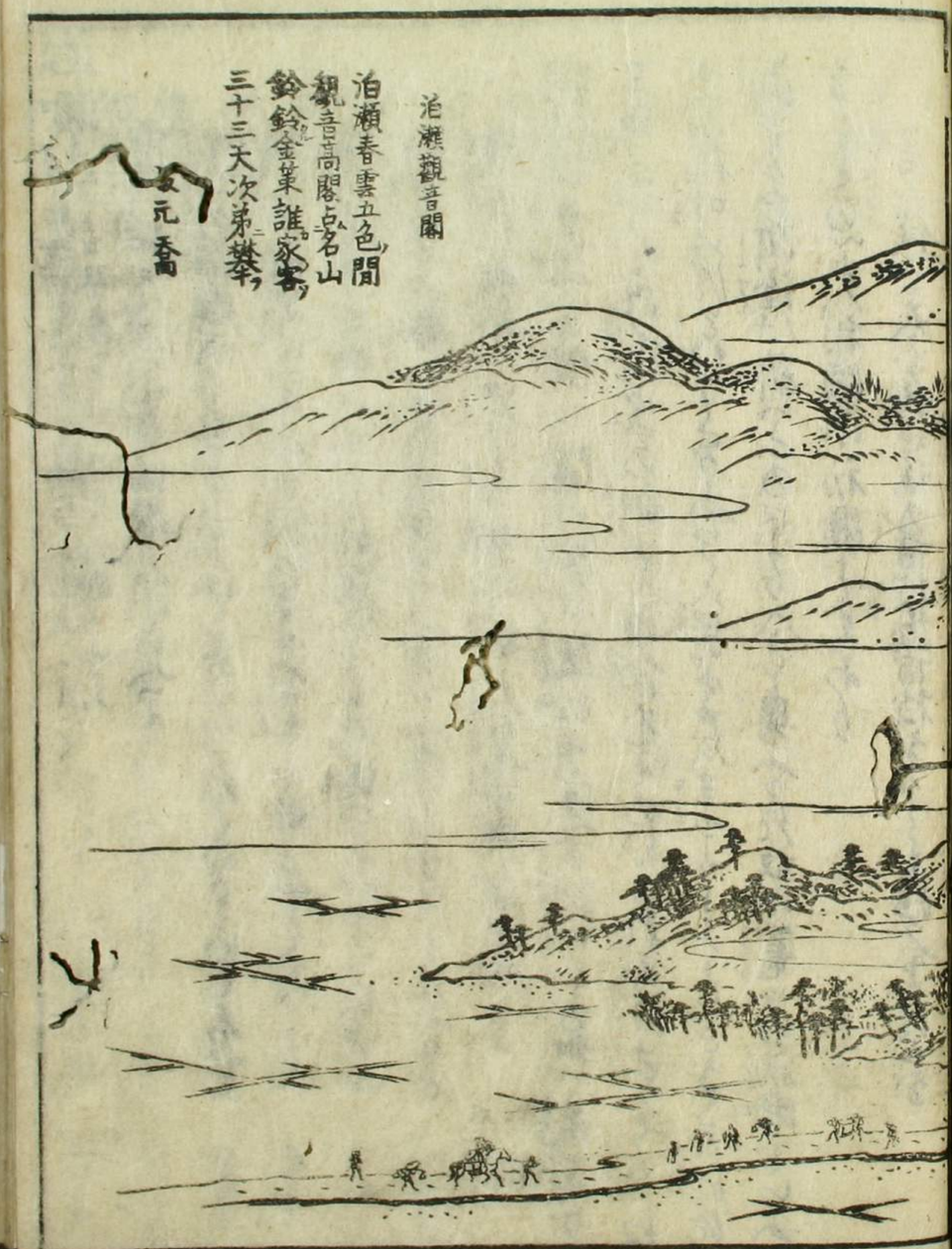
初鳥

瀬居

泊瀬観音閣

泊瀬春雲五色間
観音高閣占名山
鈴鈴金菓誰家客
三十三天次第攀

文元喬



泊瀬

初瀬村の上ふあり谷幽こうこく山に巖蹊を故に陰口の初瀬と呼人

雲ハ拙き海士小舟泊瀬山こしらへ

方業

陰口の泊瀬川とよみけるは正しくみられ侍るといへども

字彙玉

陰口の泊瀬川とのこさんいさとふ人もあらん

人麿

陰口の泊瀬とは陰口の道にてこゝは泊瀬

陰口の泊瀬とよつ屋あとこと石とゝもゝ式とふる

陰口の長谷小國に夜延爲

弟大皇寺與奥家り

詞林採葉抄云隱口隱口陰口先達古訓かくの如く區分り

其中ふかく所くゝ字の訓あるゆゑふたそのいとれありまゝとり江

よふ相叶ハ所ゝ

泥ぞるゝ新詮山新山のにり入く奥ふれ故ふ篭口の初瀬とゝ

ゝるものを大初瀬小初瀬とも侍り

若ゝ代ゝ本ゝ世後の百枝概百枝

車之ゝ

海小舟泊瀬の山ふ

詞林採葉抄云海小舟初瀬ハ泊瀬ハ

十月

後拾遺

ゝ道のゝ紅葉の色もみるゝふ

金葉

泊瀬山ふ

詞葉

夕旁に拙ハ人を初瀬山

千載

を初瀬の花ハ盛ふ人ハ

ゝかゝ

彩古今

年も

彩動撰

後撰拾遺

後拾遺

泊瀬女の

小思ハ

匡房

兼昌

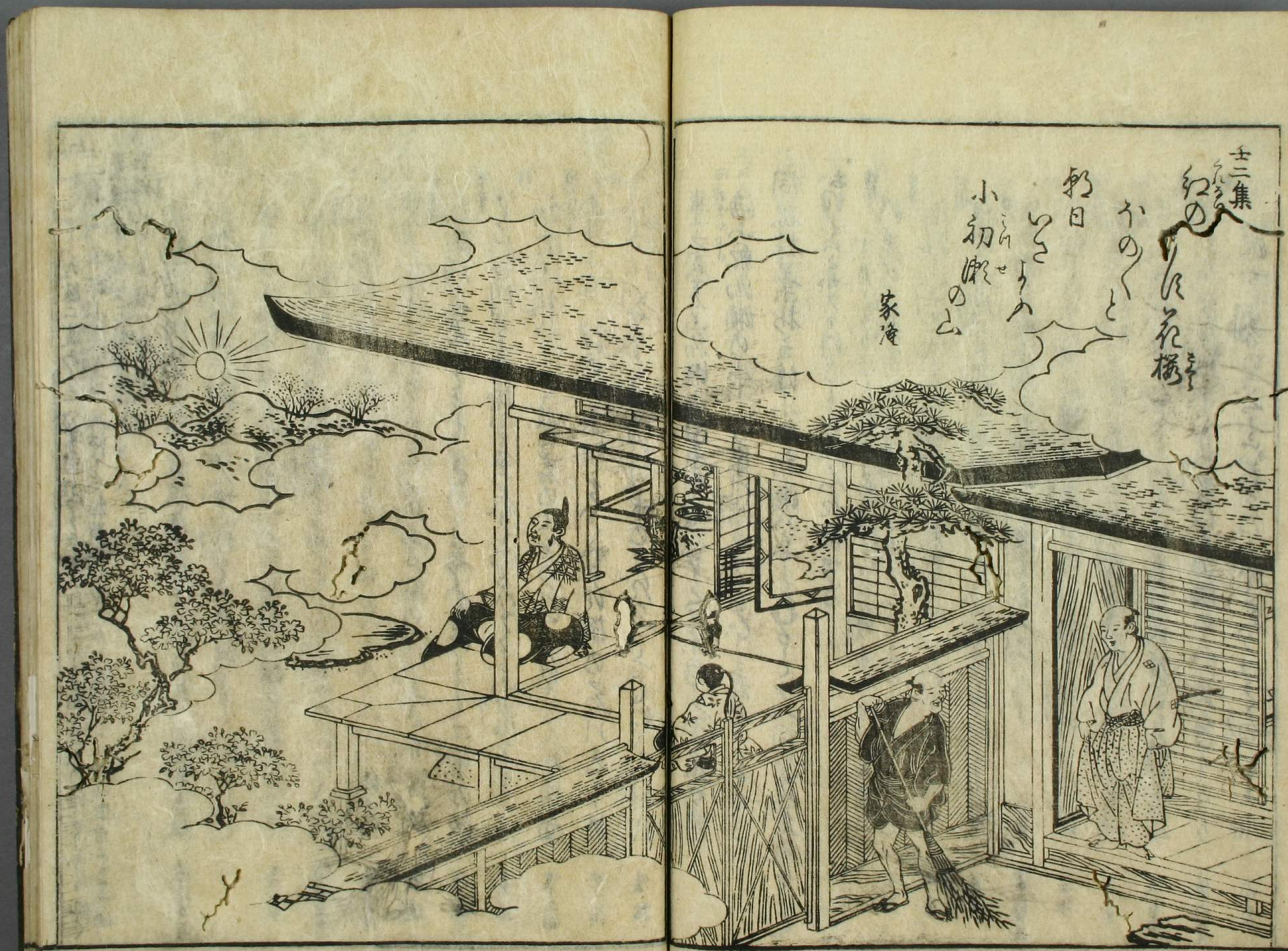
後撰

道家

後拾遺

千載肉食

為家


十二集
初の花桜
かのくと
朝日
いさよふ
小初瀬の山
家淹

泊瀬川

源二流あり 釜平川 信濃国佐久の郡より流れ出る黒澤

本都小夫笠社 紀行 金屋三海豊来 和田村ふりてより二流加合 初瀬出る黒澤

恩寺 江堤 高 城下郡に入

初瀬川 古川のぶ 二年あり秋 手ぶくろ 二年あり秋 後人詠

泊瀬川 波さへや濁らん 世ふ後 我身とおりへ

涼しさは秋や深るを初瀬川 有家

石そゝぐ初瀬の川は波枕 後拾遺

泊瀬女の白ゆふ花 後撰

泊瀬川 家集

初瀬川 後成

モ集 くれ川さへの桃ふ色つれ 後拾遺

初瀬川井でこそ波の岩の上 後拾遺

後撰拾遺 あま小舟 初せの山系折 家集

初瀬川 後撰

初瀬川岩りさへひ水のうら分 後撰

伺初瀬川 百瀬川 とゝ 長谷寺 ふ寺 でゝ

ひさるあり 初の瀬 故 初瀬 初瀬 とゝ

八雲抄曰 泊瀬 初瀬 日新ろり

度末世

六帖 海士小舟 世の 浦 ふ浦 ふ

御集 おぼ 泊瀬の 波 白ゆふ花の 後拾遺

木葉宮

藻塩草 足 初瀬 初瀬 木葉の 赤人

親宮 足 二十巻の神社の 黒人

宮 紅葉里 藻塩草 初瀬の名 拾玉 おのゝいでゝ 郭公 紅葉の山ふ 後拾遺

鶯山

藻塩草 大和國 澄月 奇抗 初瀬 天木 井 谷の 鶯の山 後撰

鋼倉山

泊瀬山の中 家集 倉山の影 相模

一名居の初瀬町の人にあり
額の菩薩神述作しのく仏年縁起の
中の蔵王権現の真詞うり隷書
あり て安井御門跡道信卿の
御筆あり
功徳成就墜
諸佛經行砌
諸天神祇在
此山振威験
源氏也法
あり

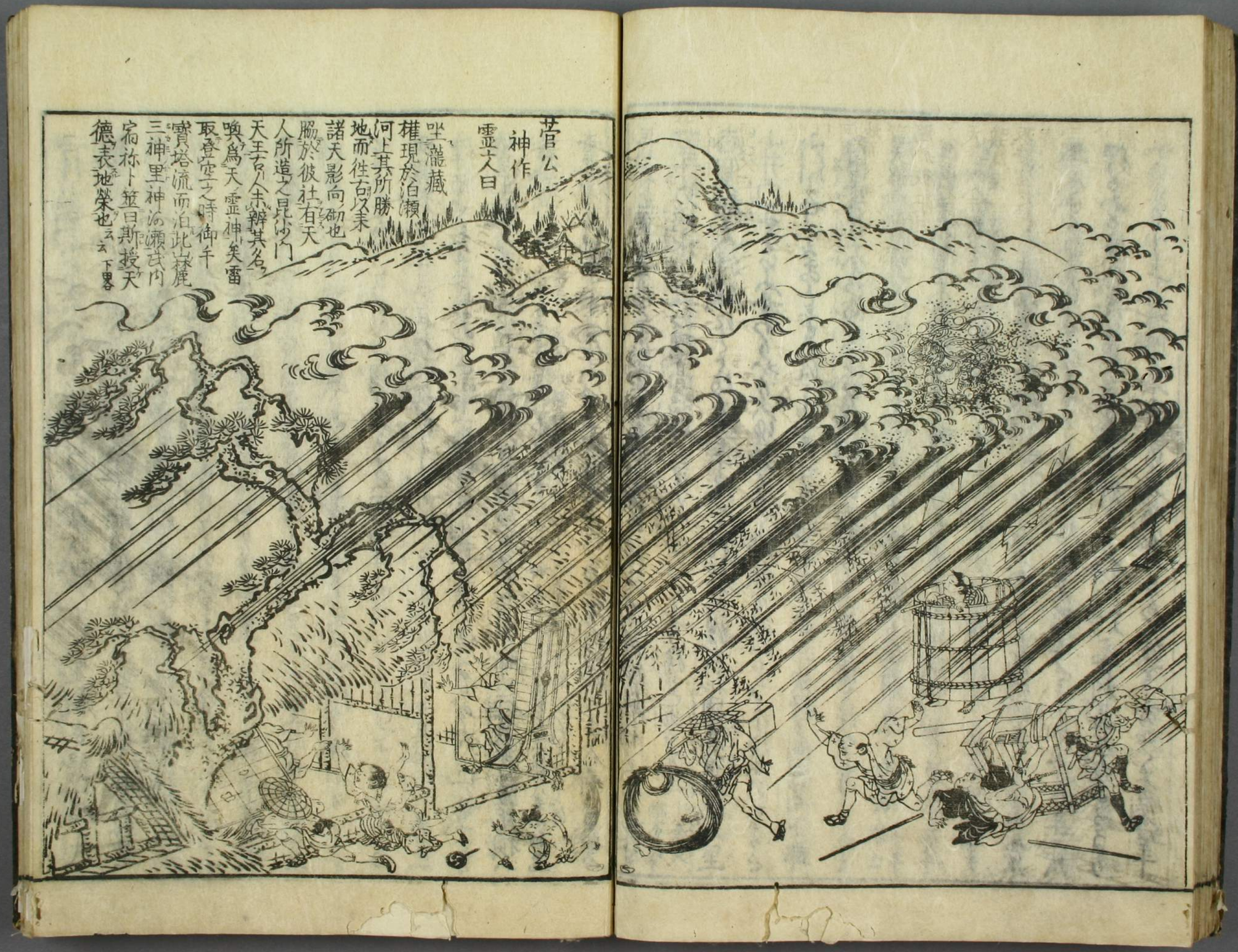
古河野に三本杉 長尾氏曰三本杉は本堂の東北下杉の実れる小あり
古河野北の辺に三本杉の北れかくれ杉いくつ
いまはもかくやはなくやあらびろんこの古河野に流させの名所
古今雑抄
さらぬ世のつるの水に玉有杉 長尾氏曰玉有杉
さらぬ世のつるの水に玉有杉
さらぬ世のつるの水に玉有杉
つる川の杉はりごとにもたれ
後撰
つる川の杉はりごとにもたれ
なきなれぬ言つれなどと初瀬川 古河野辺の杉
顕注密勘 初瀬川の古河野辺の杉
の逢者 初瀬川に流れ杉
玉葛舊跡 長尾氏曰長谷寺の川東に玉葛の石碑
又玉の井の名所南谷鴻倉坂内とも
鴻倉神社あり
後成塔 定家塔 古河野辺の家郷
五倫八定家郷
長谷山呂坐神社 初瀬村小あり今手力雄神祠と称を初瀬寺記小
初瀬寺記小
泊瀬齊宮 初瀬氣波坂の下
天武天皇白鳳二年四月大來皇女伝
天照太神小侍せしめんと欲ふ故小泊瀬の齊宮小居ス
日本紀

豐山神樂院長谷寺 泊瀬とふあり 延喜式曰豐山寺縁起曰豐山小
二名あり 泊瀬寺又本長谷寺ともいふ 當山縁起文の
執筆ハ 遣唐大使中納言従三位兼行左大辨春宮太夫式部太輔菅原朝臣某と記ぞれ
ハ則天滿宮の御筆〳〵其文圓の中小地物の文を抜
上求菩提之山高下化衆生之谷深四神相應之靈場一天無雙之勝
地也玄武碟碟之嶺蘿苔之松縁徙々開四時之花以送鶯臭於
萬代之春青龍流沙之谷密岳之巖容閑々交雲霧之色以運
響影於千季之秋朱雀泮澗之谷雲霧施降而織嶺晴之岡
覿似澤池掃温勞炎々疫氣白虎禮儀之方更無逆賊之行
君皇修義人怨自解廻政權儀物情相似定知此山者古仙術行
之跡衆妙吉祥之砌也

夫當山ハ元正天皇養老八年小弟創又文武天皇の御時德道上人
うれ小造立ともいふ本堂八棟仏像十一面観世音の長丈六尺 拾芥抄 二丈六尺
二王門南小向く楼あり上ハ瓦葺の長廊ありく長廊乃下り
石階あり諸堂ハ西ハ路あり北ハ鐘楼東ハ鼓楼又小ハ光明上人坊舍
学寮あり真言宗ハ新義の学侶集る新ハ沈坊ハ古
紀州根来寺小あり〳〵天正十一年秀吉公根来寺破却の後寺僧
諸國小流浪〳〵智積院京都小建小沈坊ハ代代に法灯をかかげ講堂

と號とす舊長谷堂と號するひゝ泊瀬の川上龍蔵權現の社乃
やとりに大人の法とゝ見沙門あゝと雷陸とゝなりて天に登ゝ時
佛法の寶塔為てけの方三神の里神川の瀬に出ゝ武内宿禰
こゝにとゝり上せりて西北のとゝみに収まりゝとり舊名三神公あゝ
こゝて泊瀬豊とゝ申すとゝ百余歳を経て弘福寺の道明聖人
これ石室に入りまれゝとり里の名にとりて泊瀬まとせり天武
天皇勅をくだしゝ彼聖人のとゝに精舎造営せゝれゝ（釈書曰今の十一面堂）
聖武天皇の勅定ありて德道上人（釈書曰法道仙人）諸人公をとゝ天平七年
八月十六日に上棟十九年九月廿八日に供養せゝ勅使を中納言
奈良麻呂道鏡師を天皇の傍菩提僊師を大傍正行基とこの時乃
瑞應本縁起に云人くとり（德道上人は播磨國揖宝の郡れ人姓は辛矢田部名は麻呂後の名天武帝帝位に二月廿日出家を年
廿八當寺驗記に白神亀三年十二月晦日大傍部に住に）
六年酉に観世音菩薩に德道上人の大師通明大德のおゝに志とゝ

長谷の里に来ゆとゝに霊夢あゝ人の老翁語て白僕聞紀神天皇紀十
一年の洪水に近江國高島郡三尾の谷より流れ出る木（樹木長十余丈
志賀郡大津浦にとゝはりて七年ひと経て其後大和國高市郡八木里
小井門にとゝ人女ありおゝ佛像にてとゝ人木のちゝと
に入りまとゝ申すとゝ人くに死せり此里に千余年に経る同國葛下郡
に出雲臣大名沙に法名（釈書大滿）といあり十一面の像を造りまとゝ人と
同郡當麻里に川よりとゝ人も大水も死せり此所に五十余歳（釈七十年）
公経る天智天皇紀七年城上郡長谷里袖沙の浦に捨て千年
を経る（釈廿二年）かの本に出ゝ人ゝ所毎に災疫あゝとゝ人
ふゝとゝ德道上人（釈書小法德蓮）老人のあゝとゝ公伝ゝとゝかの霊木公
里人にとゝひとゝけとゝとゝも佛公作ゝとゝん粮とゝとゝ十八年公
経るある夜の夢に東の峯に三の燈あり（今三燈の峯とゝ人）無利益公表とゝとゝ
かの峯に上て造佛とゝとゝの告公蒙とゝて後とゝ人の如く告公光年


菅公
神作
霊文曰
坐瀧藏
權現於泊瀬
河上其所勝
地而往石以来
諸天影向砌也
脇於彼社有天
人所造之見沙門
天王石人未辨其名
喚爲天霊神矣雷
取登空之時御千
實塔流而泊此嶽麓
三神里神泊瀬弐内
宿祢卜筮曰斯授天
德表地榮也云云 下畧

二月に霊木の東の峯にしてのぼせ序を結び聖朝安穏藤氏繁昌乃至法界平等利益十一面の像を作りたてまつらんと大悲の誓我願の感しけしくこの霊木其の用ひて佛となしまいらせて常に祈り奉つ元正天皇即位六年七月房前にこの旨に申し入らの為に今とく汝君臣ともいの敬んて其の思ひあるやうや聖人言く佛法興隆只君臣に有りとて信うやまひ元正帝に奏しかるにて聖武帝に奏して神亀元年二月二日宣下ありて香稲三千束を営作の料にあてられしかとも いまだならざるに同六年四月八日よりて大和国内の両國税を年の正税を給ひしより御衣木の加持あり且は修行は道慈律師なり三日のあひだに十一面観自在菩薩の像なりぬ巧匠は稽文会稽主勲なり天平五年十月十八日開眼供養あり導師は行基菩薩呪願は義淵大徳へ（此供養の年に異説あり釈書凡二巻に神亀三年三月成就とし同廿八巻に神亀四年とあり水鏡曰神亀元年とし導師は道明咒願師はのされもかくとし）霊像なりし天平元年八月十五日の夜瑞夢あり忽然として金剛宝盤石土涌きけく外にあらはる其方八尺ありて定跡の穴あり其像の御足にそひたり世にもめづらしき十一面の像なり其上にこの石に二枝あり一枝は足より一枝は麻伽陀国佛正覚の宝石也一枝は補陀落大悲の坐石なりなるとぞ此宝石の左脇に龍穴あり天竺無熱池に通じぬとしるせり（已上本縁起文大意）

登廊（當山驗記に曰一條院の御時本日の社司に信近といふものあり正頭中臣信清の男蝕眼を病むるを祈によりて大悲にいのりかなはれていくほどもなく癒えしかば）建立せしとなり

長谷寺観世音菩薩は住吉物語にも慈悲のりてあらたなるよしみえたれば又玉のかつらに右近が申たる事多くめぐりあひし馬頭夫人の貞女とありて給ひなるはしかぞんなるたがらもおしからし吉備大臣の野馬台の文をよみけるも此読といへる書にのせてあるとしるや

再興（朱雀院天慶七年正月九日炎上大悲の像は煙となりせ給ひしかとも頂上佛の御ぐしは後の山の木の上に飛び行てとどまりしとなり一條院正暦二年十二月三日諸堂炎上観音堂はのかれし後一條院万寿二年正月廿七日観音堂の庇より火出たりおのづから消たり已上當山験記にみえたり百錬抄曰長暦二年三月十七日長谷寺堂舎并僧房焼亡本尊不焼験記略曰後冷泉院永承七年八月廿八日炎上頂上佛の面は梧桐の枝葉の中にかくせ給ひしく

春今
きりせぬそ梅を
人のいと
かもきくに
古ひつる
花をむすこの
帯よ
白ひろる
宿かりん花よ
夢うつし英人之の
素堂

百練抄曰永兼七年八月廿五日燒亡観音像爲灰燼
長鎮録曰永兼七年十月造佛の時分の仏面に納る塗料漆るに関白左大臣以下の仏奉加為の初め皇后宮藤内教王家法勝寺僧正覚と者の附せ給へり天喜二年八月十日供養あり遺師法勝大僧正明尊呪願八權少僧都四家讀師八權少僧都長守なり
百練抄曰天喜二年八月十日供養長谷寺
霊験曰堀川院喜保元年十月十三日観音堂経蔵鐘楼僧舎焼失以日観音堂宝座並灰の中より光放こと二時なり人々怪く炭灰に撥倒こと頂上佛面部不焼〳〵く在に
長鎮録曰兼徳年中に観音堂昇廊再建あり其外八事〳〵〳〵三十余年を抑〳〵終ふ天兼元年に供養あり
長鎮録曰順徳院建保七年二月十九日炎上同年兼久元年に月十七日より
八月廿日とふ観音の像成就を佛師々法眼快慶安阿弥陀仏と号に付り
灰燼の中に残りしを見し仏身中より出光を放ちより眉間の白毫の内より招提寺の舎利一粒出こと偖是を法阿弥陀佛
所持の舎利と
興福寺略年代記曰弘安三年長谷寺炎上貞治二年長谷寺供養明應四年十一
月十二日後長谷寺燒亡同五年八月十五日長谷寺新始

護法善神

（猪鹿の東北脇ふあり）

霊験記曰元慶五年二月大和國十市郡土師時貞
とゝひろものこと共ふ當に系龍〳〵るふ其ふ俄ふ身衰く後三刻ふ
七蘇せ〳〵ひ〳〵ろ〳〵ふ永延馬頭夫人〳〵ひ〳〵ふ後この〳〵に侍く
護法善神とゝ〳〵ん其名を大唐國第四皇后君嶋女大神とゝ〳〵ふ
宋朝陽別穂積郡ふあり〳〵こと我ろ〳〵ひ勧請ふ應せ〳〵ん
其験ふ虎皮の出現せ〳〵所ふ我ふ向と示〳〵ふ人々
實ふ所其まに
ゆろと書を

白山權現

（當山ふあり）

霊験記曰其まの阿闍梨行円とゝ〳〵ふ加賀國白山
ふ侍〳〵に甲斐國八代郡より法華つ勇に權現祭〳〵ひらせのひて
家泊瀬ふ鎮坐せ〳〵と神詑あり又一鏡飛来り〳〵ふ阿闍梨の夜れ神の
ほ〳〵まれ〳〵ろ天禄二年七月初日午の刻の半へそれり當ふ浄
同八月三日ふ社ふ建〳〵ひ〳〵ふ
〳〵ろ〳〵ふ

（観音堂西北の隅）

其夜長谷のさ〳〵ふ大石

三国伝記
同之

蓮華谷

（小蓮華院〳〵後小角仙ふ〳〵あり〳〵勤行の聖伽にむとこれ小十死納女多上に出現〳〵ひ〳〵ふ又天人あまろ〳〵ひ〳〵蓮華谷と大聖と
侍せ〳〵琉慈あり聖武天皇の勅願〳〵〳〵ひ〳〵ふ
ひ〳〵〳〵ふ蓮華谷と號せ〳〵八〳〵濃之
遺明上人廟験記曰公之二王堂の内ふあり安養院
聲念仏〳〵〳〵侍る
〳〵八十九才
生涯勤怠〳〵〳〵〳〵ふ〳〵〳〵仏仁上人ふ〳〵侍く
保安元年九月十六日高

くりはせのとの
のはく小野の初猟果の
ふ小あらむの
雄略天皇五年二月
帝の瀬の小野に
遊猟しらをひとの鹿
のけしをえと獣逸
あらくくとこの
日本紀曰
こりりくの国
のの歌のふとふきこと
ちの今時也
わの後也
あやよくくか也

藤井坊（今癈して永享の比ほひ南都成就院法橋清賢こゝに住し長谷寺長谷の佛菩薩五十首）

夕時雨ふるかのいなさゝ下露も氷とくなる冬の山ぢ哉　正徹

別院長勝寺（今癈して職記日宇多天皇勅願天福門院の修造なり礎礎帝安平ふ院ありしかたし大覚寺の中に）

貫之梅（長谷なる田廊の中ほとりあり）紀貫之幼おのこなりし初瀬に住る伯父の玄井坊浄真の方に学文し十四五歳ふるく都へ上て朝座へ仕へしのち玄井坊へ帰られし幼おのが時植置し梅の枝折て斯定宿年と

浄真（古今）

人にさそはれもてきぬ古里の花をたむけに春ふかぬ匂ひけり　貫之

貫之家集

花さかぬ里もあるらし春ふかぬ咲のみ植る人の心を　浄真

興喜山天神（一名三燈嵩と云）

神殿を天武麻呂ゝく一生不犯酒肉を禁じ断て当寺に住し給ひ

公家ゝ仏道を信ずる俗人あり天慶五年十八月武麻呂記

堂小屋夜ゝ一ほど孤ゝるに篤幅子狩衣して老翁忽然と現ず

我い足大威験の神なり山に住し給ふ大聖ふ値遇せんと思ふ

しかば爰にさいふりその月の廿日を再会にこと元の所ふ

泊瀬川の下武麻呂が家の前ふ六十歳ばかりの客俗石上に坐し居

さり足則爰ふ見し人なり武麻呂怪しおもふ所に来りて

あんどしるるそれより大弘の相版公爰にあへば小語をそのゝせ

ゝ武麻呂道明上人の廟おのゝく近付神酒公るん勧発ゝり

新ゝく御堂に詣ひしゝ母ゝ老ゝ念誦あり久るに夜半の比ふ大

より雲ゝ雲ゝ客俗公慶ゝり遂ふ玄晴ゝく後老翁家ゝ足

右大臣正二位天満天神菅原の道真ふ山ふ居公ゝ大聖と

値遇し三類の苦公免んと思ふ龍蔵権現答ゝ曰ゝ

ゝ初瀬の川上に居せり此地ふ仏法相応の地

鎮護國家の砌ゝ化度利生の瑞相金剛不朽の寶座之今

より君にゆづり奉る永くこの山此地を守りとあり後へりし本末此地を因曼
陀羅尖をもてよくよれ祈にけるに君が為に大木の松ありかの祈りし位
しかへべしと仰られけるとぞ天満天神即出に来りし俄に雷神に現
し松の本に至りかの瀧蔵権現の言に断惑修善與喜地なりとの給
より與喜山天神と號け其ゆゑもろ〱與喜里となし此二神の御物
かたらひ武麻呂先のびて伝へけるぞかし足洛陽北野天満大自在
天神にて御座之初三年を神祠もなくして只松の本にのみて
社としるしにたてく神詫ありて天暦二年七月武麻呂寶殿に
そを建て祠をまつれりと 三国伝通記

此御祭ハ毎年九月廿日にして郷内の氏神と此初ハ当山より新向ありし修に
表しく神輿に大仏の前に出しまする今の惣門の前なりられ武麻呂が
家ありし次に登大路の四辻に仮に居られ今乃與喜村の北なり道明の廟あるく
神供にて備ふ今の二王堂あたり是武麻呂二十才にてをくめまゐりし祈とうやまふ
より假社ありしに一条院御宇勅願として後朱雀帝に詔して
仁王堂にうつしく天神影向の所へおのひ損坂の道にあらためて
直道に神輿あり今の登廊これより武麻呂が家ハ今の銚子が岸とも
いふ公役赦免の地也

天神御修にうけさせたる石ハ長谷の町の東頬れ北にあり又天神に二才になり
し石ハ二王門の内に今にあり

泊瀬朝倉宮 長谷より十町ばかり南にて岩村其所といへり帝王編年記曰
泊瀬列城宮に即位ましまして 城上郡なりとぞ日本紀曰人皇廿六代武烈天皇元年泊瀬
都は此地に定めたまふ

笠山 笠村にあり巖の笠の如し故に名とし其所は
朝茅原といふ藤原时日笠山大和國とぞ云
万葉集に
雨零者將蓋跡念有笠乃山人爾莫令蓋霑者漬跡裳 不知表作者

鷲峯山竹林寺 笠村にあり
大臣不比等の創建なりといふ俗に笠の荒神と
いふむかし役小角わけひのぼりし霊山にて善無畏三蔵来朝乃時天竺
と称せしの中にみえて天から天人所造の笠が降り来りしより此宗
はしをさせのひしより笠山の名あり 此笠霊寶として今にあり 荒神ハ良辨
僧正示寵の時荒神現形したまへ僧正小板に寫せしが其後弘法大師
かの寫像にて摸して荒神を刻みひしより永く山にたてて給ふこれ社中に
の荒神ハ三座あり 土祖神一坐 澳津彦命一坐 澳津姫神一坐 舊事紀曰
澳津彦神ハ大和迦流美豆姫に妻として生る御子 澳津彦與津姫
此二神ハ諸人竈神にいはひまつるなり

尾里焼作社
井の内
焼沈の
俗に
神代の焼
焼しの名
みさひわる焼の
池つたも
琴琴
こげろ新
るべてそ
るも

栗栖原 引田村にあり 瀧倉神社 瀧倉村にあり 瀧倉禮堂のこと今昔物語に出

比賣久波神社 にあり 城下郡唐院村にあり今子守社と称す 神名帳出 神宮寺あり古鐘の銘應永廿六年四月鑄 糸井神社 結城市場村にあり 今来日と称す

屏風里 屏風村にあり 王林抄曰聖徳太子鵤宮より攝宮に通ひ給ふ道のほと遠かりしかば新たに近き道を作らせられ給ふ時に

縁とりて其中路にして供御を奉るに常に屏風をたてしよりこの名あり 遊部川 十市郡より流れて初瀬川に入

冨都神社 冨本村にあり 神名帳に出 三宅原 宮古村にあり 宮古森 同村にあり

錦繍 あきのゆふべの錦のふへを志るして宮古の森のあるをかたるなれ 拾遺

盧戸宮 宮古黒田二村の間 都杜にあり むかし孝霊天皇黒田に都を 寺川 十市郡より流れて八尾に初瀬川に入

法樂寺 黒田村にありむかしは伽藍巍々たり 今本堂講堂地藏堂存せり 本尊は勝軍地藏尊 秘佛也 さるは孝霊天皇の陵地にして聖徳太子の開基とぞ

孝霊帝の陵は葛下郡片丘にあるの延喜式にみえたり又孝霊天皇の黒田の皇居の跡なるや

鏡作坐天照御魂神社 八尾村にあり此七箇村の氏神とぞ 香井の内に鏡の池あり今鏡池の

鏡作社二座 麻氣神 一座此神は天糠戸命なり 伊多神 一座此神は石凝姥命なり 已上兼倶記

石凝姥命は天糠戸命の御子なり石凝姥命は天照大神の岩戸にこもらせ給ふ時天の香久山の銅をとりて日像の鏡を鋳給ひし神なり 已上古語拾遺にみえたり

延喜式三代實録に出 鏡作麻氣神社 小坂村にあり今まに杜と称す

韓人池 大和志曰唐古村にあり今柳田池と称す又長尾氏曰唐人池は高市郡唐古村岩橋寺の東に池の形とて人家の田地ありこれ韓人池のあと也村の名を韓子と書てからこと訓しを後の世に唐古と書しが近年は唐古と書なり

日本紀曰韓人池は應神天皇七年九月高麗人百濟人新羅人等来朝す作らしむとなりより韓人池と號せり天皇は高市郡に都せさせたまひて輕嶋の明宮におはしまする

新六帖 からひとのいけの宮わ昔よりたえずそめてし韓人の池

池坐朝霧黄幡比賣神社 法貴寺村にあり今天神と称すとぞ氏神とぞ 神名帳三代實録に出

法貴寺 實相院と號す法貴寺村にあり傳聞聖徳太子の開創なり 伽藍巍々たりしが年久しく頽廢して本堂一宇存せり本尊薬師如来なり百済國より来朝といふ

齊宮 天王廟あり村氏天神とぞ 法貴寺のうしろにあり杞倉あり俗に十五坪ね伊勢斎宮跡といふ 宮は今かくしまし長谷川堂に守護させるよりこの名ありとぞ

服部神社 大安寺村にあり 今波都里神と称す

夫木

敷島の山ぶきの花
里々
大和川
たゝもりぬ
ゆゝ
ゐと
こゝと
さけ

坂手池 大和志曰景行天皇五十七年九月坂手池を造る竹を堤の上に植らる 池今涸く今田畝となる 堤を十市郡東竹田村にあり

阿刀村里 坂手村の巽にあり 今は人家なし

相模家集
庭の面に花の盛も露けしく涙おちつつ阿刀村乃里

倭恩智神社 海知村にあり 神名帳出

大和川 城上郡より流て倭恩智社の西南を経て大和川とらひ 余は廣瀬郡に入て廣瀬川といふ

夫木
大和川桜ちられて流来ね初瀬の方にあらしふくらし 従人不知

村屋坐彌冨都比賣神社 藏堂村にあり 今大王と称せ十に村の氏神とす 神名帳出 土人森屋のやしろと唱ふ 日本紀曰 神は諸霊を殺す

あらはしけるに杵當社の神功る天武天皇と大伴皇子の合戦ありし時 高市郡大領縣主許梅に神託ありて 神これを崇め社の事代主神又牟狭社の生霊神なり 神武天皇の陵に馬並に種々の兵器を奉るべし よて天皇の陵にのりてそらん 又西の道より軍を来りうまんとしてあるべしといふ 則ち果して西より来る まさしくその陵を祠り三神に位階を贈らるる 則ち軍に利あり 済く不破へ大伴の皇子を亡しまひり

村屋神社二座 藏堂村にあり十三村の氏神 もとは神名帳出

靫負御井 藏堂村にありいまは大井戸と称す 東大寺舊書軸に見ゆ さる
續日本紀曰寶亀三年三月靫負御井に置酒を賜ひ從五位以上に及び文士曲水を賦さしむ

岐多志太神社 二座 神名帳出 在所不詳

久須須美神社 神名帳出 在所不詳

吹上嶺 宇陀郡上萩原村の北に

墨坂 萩原村にあり 日本紀出

小野榛原 あり城上郡の界 萩原村にあり 日本紀出

宇陀川 一名萩原川 東西二水下井足に會し 末は山辺郡に入

宇陀野 宇陀の町より一里ばかり巽萩原村あり それより一里ばかり北まで を むかしの禁野と云 つねに代々の帝百首に見へたり

推古天皇十九年五月五日に菟狩を菟田野に志給ふ 晩を時とりふしつる藥原の池のほとりに集りてそれより供奉せられしけるに 諸臣はおのおのそれぞれの冠の色に従て冠を著しつつの髻華をさす 四位は金を用ひ五位は豹尾六位はかの尾をさしける 日本紀

貞観二年十一月三日詔して源朝臣融に大和國宇陀野を給ひてよりて狩し遊び給ふ 三代實録

万葉
宇陀の野の秋萩しのぎ啼鹿も妻に恋ふらく我にはまさらじ 丹比真人

日の影のかよはぬ奥やもとゆゐの宇陀の御狩場

氷室 在所不詳 大和國に卅余ケ所氷室ありとぞ 氷室の和歌何れも其所さだからず 深く按考あるべし

夏山の
都ゆく涼しき風や通ふらん宇陀の氷室に人こそ山風

每年菖蒲郡の押波の頭に
人ありて毒草よく薬の菌を
食ひ一名れん病を助く毒を
鬼谷子の子孫鬼谷子の
瀧州の不死草の話あるべん

香炉山 赤嶺村ふあり山巓に龍王祠あり旱の歳ゝ雨ふる時ゝ南の禁ゝ清水あり
膳の名しつゝ側ふ麻ちの世あり
篠畑神祠 ふもと村ふあり いまゝ〳〵 ゝ天照を神
所鎮坐の所とつゝり
赤人塚 ふもと村ふあり土人 檜牧溪 ゝ源石割嶺より流ゝ
圓塚しい人 檜牧村ふあり今 今井明神と
御井神社 社と神名帳出 石神殿 檜牧村の西ふあり
十二社と社を
嶽山 自明村の北ふあり山岩高〳〵 聳ゝ く
山に巨巖あり倶倶利岩とゝつく
佛隆寺 赤坂村ふあり山ちの麓の治朝所舞畫に出ゝり或日迦ゝ頂ふ
鑄ゝみ新に鑄ふゝ ゝり故ゝ古後亡〳〵
室生山 室生村ふあり安明寺嶽愛宕嶽昆沙門嶽等支別あり又仏ゝ窟叢擘窟
あり窟前に壺井あり岩〳〵 青巖踏ふ遊ゝ真に塵外ゝ
嶮涯しいひつゝ 室生溪 ゝ源ゝ精峠より流ゝ赤ハ
室生龍穴神社 室生村荷坂ゝの氏神ゝ 或ハウ一山又ハ面一山とゝハ
神名帳三代實録出
室生寺 室生山延喜式 榧生山三代實録
龍穴神宮寺 ゝて日域無双の真言の勝地ゝ弘法大師の開
基ゝり 伽藍五宇五重塔十三級石塔小和尚 拝山ハ枝枝ゝふ はゝみゝく
僧院三宇織田常真石塔あり
青天につゝゝり巖石樹ふゝ

川浪ふ玄の高ゝ ゝ巖ふ秋の雨ゝ
かゝあゝ海ゝ橋ふゝ 盧山のゝ
鷄足の ゝ弘法大師の住ゝ
岩尊院ハ ゝ山傍ゝ護摩ふ修せゝ 巖崛ゝ苔のみ
むゝ風こゝ宿ゝ伽藍荒ふゝ 宝鐸響あり
て嵐冷ゝ 新ゝ霊區ゝ世の人女人の高野ゝ
鎮守龍穴祠ハ釈慶ゝ室生山に閑籠ゝ 一千日黎河橋ふゝり
容儀體佩宋翠ゝ女の顔ふゝ 慶ゝ即身成佛の
を授ゝ ゝ慶ゝあ
明ふ仏ゝ ゝ
遂ハ仏ゝ ゝ
いゝ ゝ
ゝ ゝ

七尺半右の方に小松あり高さ丈の長さ丈余りて丈色の光あり

是より佛法擁護の神とあがめ山地に祠を建て

味波比賣命神社 荷坂村 山糟溪あり源山糟の山中より流れ出曾爾川に入

血原 上田口村 神武天皇詔して天孫兄猾を誅し兄猾兎田縣に居あり

しかるに兄猾兵を糟溪に仕禮兄猾を誅し遂に悉しかるに

さきだつて攻めて敗れ兄猾とのがれ穴に入り

そこにふたたび命を喪ひ其屍只ちやがて斬てなり兵血のながれ

血の號 兎田の血原という 委しく書事紀日本紀

漆部郷 今曾爾 むかし宇多郡漆部里に風流の女あり花顔髣髴

しかく一笑千金の容色あり足をふみたちの部内漆部造磨の妻うて

七日を経て家困窮しかく食なしかるに妻織るに仕へ妻織つて

日々沐浴しかく身潔し綴を給へ日毎に洗ひ清く菜羹をとり

常に家を清くして行を潔へ端坐して唱へ念清恰天上の客の如し

難波長柄豊崎宮 孝德帝 甲寅年 此の風流の生質神仏感應し春

野菜を採ひ仙草を食らく天に飛去る誠に方士の類 日本霊異記

紫虚元君南岳夫人 曾爾谷諸村を行く

曾爾川 源粉列の鬼大野より中ほどに出 末は伊賀見に至り伊列に入

楂井溪 源三あり一は室生より一は曾爾より一は屏風嶽

三源楂井川に會し伊列に流れ出る

屏風嶽 長野村にあり山形峭壁一枚本叢成を

屏風の如し国名名所

門僕神社 今井村にあり曾爾谷八村の氏神名帳出

國見嶽 伊賀目村にあり粉河の三列に跨る 此嶽 亀山 高く聳えて巒

御杖神社 神末村にあり今葛明神と称す 雄嶽 今井村にあり 雄嶽 葛村にあり一名鎧嶽という

神末溪 源神末より出 菅野川に入

桃股川 源左野郡に見る山の東より

倭姫詔曰新に大杖と号け杖あり此下に石あり土人云ふ昔倭姫命の杖なり本末ともに杖なり

石に杖を立て馬をつなぎ杖を樹て石を義經の馬をつなぎ杖を樹て石を義經の馬をつなぎ杖を樹て

新に中ほどに樹て石を義經の馬をつなぎ杖を樹て石を義經の馬をつなぎ杖を樹て

いまの杖とされたるのさ杖ととなえたるの色にようつひそなる

漆部仙女

八幡祠と芳野村ふあり　源有綱宅址下芳野村ふあり土人曰殿屋敷と称とえ　文禄六月
源義経の妻婚うり東鑑に見へたり　慶長六伊豆右衛門尉源有綱と合戦に自殺し是伊豆守伊綱の聞

五吾妻野　東郷村ふあり　舊名東郷　神御子義年順比命神社右神村ふあり今右舊神と
称し神名帳及び三代実録出

日張山　又鶴山と書と宇賀志村ふあり　鶴山寺　山中に青蓮尼寺うり

籠の地　そりそれより伊くく尼の住院とくく勅行今ふくくを抑
中将局は横佩右大臣豊成の息女うりしを継母の逸に かつてむさりしふ
捨られ函谷に籠りくく尼成る者の家ふわくそひめひしを父右大臣よ
聞くあらんかの不意対面くく故郷にくりのひに更に厭離穢
土の心絶ゆくく十當麻寺の實帰法師に剃髪くくを心尼
とやしなの改名くく法如尼とやしなくく法如尼と成給ひくく系玉菴と号し
欣求浄土の外心にはさるくく終に浄土曼陀羅をうて往生の素懐
をとけらるとくく　酉曼陀羅

櫻實神社　佐倉村ふあり　神名帳出　岡田小泰命神社　小日村ふあり　神名帳出

古市神祠　右市場村ふあり　辺蘇　十七ケ村の氏神く　流古川　本郡名　下品紙漉て東川に入
都賀那太神社　氏神之事に祈て禱らふ験あり　布瀬と称し　村の　伊那佐山　山麓村
宇陀水分神社　神名帳三代実録出　下井足村ふあり十村の氏神之　林野　建立村ふ名本紀曰雄古帝
十九年九月吉宇陀社疫癘くく礒のくく遺とり　神名帳
八咫烏神社　麦塚村ふあり　後日本紀出八咫烏八神皇産霊の霊くくまくくほとを　紀々
春日神祠　主日村ふあり　白鳥居神祠　山口村ふあり　鶴鈴祠
高倉山　上之道村ふあり　日本紀出　劔王神社　宮奥村にあり今社屋ふ
雲雀山醫王院大蔵寺　大蔵村ふあり　檪の栗ふと　土人相伝故実とし　仮宮ふの八町　本尊薬師如来うと
盤觸に上宮太子の第創くくく其後役小角練行の地とせくくれしくく
後弘法大師後鳥羽天皇の勅願うけ堂舎を建立せくくれさ峨峨たる三重塔
の大蔵寺の額あり　當山霊宝の中に小佛愛染明王長二寸の彫像あり　恵果阿闍梨うり
弘法大師に付属うり　下弦うり　授うり　下に現くくくく

鶴山中将姫

阿紀神社 遠間村ふあり太神戸明神と称し中祠九間あり溝村三十ケ村の氏神なり日本紀神武天皇冊生川上に渉り天神地祇を祭ふ

松ヶ山城 松ヶ山の東ふあり元和中織田高長公封ぜられ元禄中に至りて伊東守信廢す

男坂 半坂村ふあり城上郡の界に

冊生神社 雨師村ふあり大和志曰神武紀所謂菟田川の朝原是なり神武天皇菟田の朝原にうるわしく天下が平治しぬるの所ちなみあり當社神名帳に舊記に曰ふ[illegible]

竹川 所々ふあり河内國と云傾し大和國宇陀郡に竹川の流あり

和泉のふるく歌に竹川の淵のみどりも色ふかくなりぬ

この外ふの落ちたるもの[illegible]源氏物語ふあり

大和名所圖會四之巻 尾